Fairy tale

鈴原桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｉｒｙ ｔａｌｅ

【Ｎコード】
Ｎ４０４８Ｇ

【作者名】
鈴原桜花

【あらすじ】
異世界に呼び出された普通の女子高生。見た目をはじめ、頭脳も運動神経もすべて人並みという平凡な少女が降り立ったのは、女神を信仰する国。そこで少女は国に繁栄をもたらす“月女神の巫女”の候補として城に滞在することになり――異世界トリップファンタジー。逆ハー気味。

act. 1

三日前から降り続く雨は止む気配を見せない。朝家を出る前に見た週間天気予報では傘マークがずらりと並び、晴れる日は当分先になりそうだ。

「やっぱり止まないかあ……あーあ」

こうも毎日雨ばかりだと気が滅入る。

窓を濡らす雨粒をじっと眺めながら、花音は陰鬱とした表情でため息をついた。

放課後の教室は人が少なく、閑散としている。普段はそれなりにざわついているのだが、天気のせいもあってか、今日に限って数人しかいない。そして彼らも、既に帰り支度を始めているところだった。

早く帰りたいのは花音も同じだが、帰る約束をしている友人が来るまでは教室から動けない。これも花音が浮かない表情をしている原因の一つである。

「もう、五分って言ってたのに三十分も過ぎてるじゃない！何やってんのよあいつは！」

できれば雨足が強くならないうちに帰りたい。

友人にそう告げたのはちょうど三十分前。彼女はわかったと二つ返事で了承したものの、違うクラスの知り合いに教科書を貸していたらしく、五分で戻るからと言い残して去っていった。

時間通りに戻らないのをみると、大方話し込んでいるのだろう。

「あいつ絶対忘れてるわ……後五分待って来なければ先に帰ってやる」

密かに決意を固め、机に頬杖をつく。クラスメイトが教室を出る際に投げて寄こした挨拶に笑顔で応え、花音は再度視線を窓の外に移した。

そこに意味はなく、暇を持て余したゆえにとった行動なのだが、これが自身の運命を変える第一歩となろうとは思いもしなかった。

「ん……？」

水滴で歪む窓越しの景色。この教室からだと学校の桜並木がよく見えるのだが、それが光を帯びた気がして、花音は椅子から立ち上がった。

「なんだろ……ちょっと見に行こうかな」

携帯電話を持ってさえいれば友人が先に教室に帰ってきても問題はない。

花音は携帯電話を制服のポケットに押し込み、傘を片手に外へ出た。

学校を囲むように植えられた桜は、美しい花を散らし枝いっぱいに緑色の葉をつけている。

五月ももう半ばに差し掛かり、新緑の季節が到来し始めているというのに、こう雨続きでは景色も楽しめない。

もちろん、普段は考えないようなことだけれど。

「靴濡れちゃうかな……まあいっか。さっき光ってたのはどこだろ」

水色の傘をさし、花音は水溜まりに気を付けながら葉桜に近づいていく。木々の傍で周囲を見渡しても、先程見た光は見当たらなかった。

それほど期待はしていなかったが、何となく肩を落とす。同時にポケット内の携帯電話が震えたが、すぐに止まったので多分友人からのメールだろう。

「さっさと教室に戻らないと！あの光は気のせいだったみたいだし」

呟くように言い、踵を返したときのことだった。

急に一陣の強い風が吹き、花音の手から傘を奪いとった。

「あっ！？」

風に煽られた傘を慌てて追うも、なかなか捕まらない。

「もう最悪！待てってば！」

花音の言葉とは正反対に、傘はますます手の届かない場所へ飛ばされていく。花音は濡れるのもかまわずそれを追いかけた。

瞬間、二度目の風が吹いた。

「っ！？」

花音は強い風と雨にバランスを崩し、後方に倒れていく。花音は避けられない痛みを想像し、ぎゅっと目を瞑った。

しかし、いつまでたっても痛みはやってこない。それどころか、

吹き付ける風雨すら感じられないのだ。

花音は恐る恐る目を開けた。

「……え？」

最初に目に入ったのは、驚愕の表情でこちらを見つめる青年と、その後ろで同じように目を見開いている青年の二人だった。片方は腰までである長い金髪に碧眼、もう片方は茶色の短髪に同色の瞳。服装に差はあれど、どちらも見慣れない格好をしている。

「月女神の巫女……」

手前にいた金髪の青年が呆然と呟く。もう一人の茶髪の青年も何か言いたげに口を開閉させているが、言葉が思いつかないようだ。

（この人達、誰なんだろ？）

混乱する頭で最初に思ったのはそれだった。

ここはどこなのだろうとか、考えることは本来たくさんあるはずなのだが、今はぼんやりとそれだけを思う。

（こんな美形さんは知り合いにいないし、ファンタジーな格好も見覚えがない。それに、よく聞き取れなかったけど『みこ』とか言ってなかった？）

尻餅をついた体勢のままそんなことを考えているうちに、茶髪の青年が動いた。何やら慌てた様子で周囲にいる人に指示を出している。

どうやら二人の青年以外にも人はいたらしい。しかし、彼らは足

早に去っていってしまった。

この場に残されたのは、花音と青年二人のみ。

「伝承は事実だったということなのか？……まさか、こんな小娘が？」

金髪の青年がゆっくりと近づいてくる。それを諌めるかのように、茶髪の青年が声を張り上げた。

「素性も知れぬ者に近づくなど危険です！せめて確認を――」

「別に後でもいいだろ」

茶髪の青年の忠告を遮った金髪の青年は尚も花音へと近づくと、すぐ傍で足を止めた。

花音は顔を上げ、青年の青い瞳と視線を交わす。

「単刀直入に聞くが、お前は“月女神の巫女”か？」

「……は？」

花音は金髪の青年の言葉の意味がわからず素っ頓狂な声を上げた。

（月女神の巫女って……この人何言ってるの？）

花音の反応と表情に違和感を覚えたのか、金髪の青年が眉を寄せた。

「違うのか？黒き髪に黒き瞳、見慣れぬ服装――まさしく伝承の通りだが……」

「伝承？伝承っていったい――」

「陛下、その娘は伝承すら知らない様子。巫女に成り済まそうとした間者の可能性だってあります。どう見ても普通の小娘が巫女であるはずがありません」

花音の台詞を遮り、茶髪の青年が金髪の青年の横に並ぶ。

あまりの言われように、花音はむっとした顔で茶髪の青年を睨み上げた。

「ちょっと！あんたそれ言いすぎじゃないの！？」

思わず叫んだ瞬間、二人の目が花音をとらえる。それに少しだけ怯むが、言ってしまった以上後には引けない。

「大体何なのさっきから！巫女だの間者だのって、私はそんなの知らないし、聞いたこともない！説明もなしにそんなこと言われたって、わかるわけないでしょ！？第一、あんた達は何者なのよ！」

ここまでまくしたてるように言ってから、花音ははっと我に返る。

（やば、怒りに任せてつい叫んじゃったよ！）

しんとした中、二人の顔色を窺うと、金髪の青年は驚いたような表情をしているが、茶髪の青年は案の定不快そうに顔を歪めていた。

「無礼な娘だ……やはり巫女の器では」

「――くくっ」

突然、金髪の青年が低く笑った。

はじかれたようにそちらを見やると、彼は顎に手を当てて笑みを浮かべていた。

「面白い娘だな――気に入った」
「……は？」

茶髪の青年と花音の声が重なる。
二人の反応を気にせず、金髪の青年は話を続けた。

「娘、お前の名は？」
「え？花音、だけど……」
「花音か。なあ、お前月女神の巫女かどうかわからないんだろ？」
「いや、まずここがどこかもわからないっていうか……」

ぼそぼそと答えると、金髪の青年が視線を外し黙り込む。しかしそれも少しの間で、彼はそのまま茶髪の青年に顔を向けた。

「キルス。部屋を用意しろ。こいつの話を聞くから人払いもな」
「しかし、正体もわからない娘を――」
「キルス」

金髪の青年が、茶髪の青年――キルスを静かに手で制した。

「ならばお前、いきなり俺達の前に現れたことについてどう説明をつけるつもりだ？」
「それは……」
「それに、もしもこいつが本物だったら、お前の発言は不敬に当たるんだぞ。口を慎め」
「……申し訳ありませんでした」

キルスが金髪の青年に深々と頭を下げる。

（ああもう、何なのよこの微妙な空気は！）

花音は会話を黙って聞いていたが、この重苦しい雰囲気にだんだん耐えきれなくなってきていた。

かといって口を挟むこともできず、ただ傍観するばかり。

一体どうすれば。

「さて、うるさい奴らが来る前に移動するぞ。とりあえず俺の部屋だ。キルス、人払いを」

「かしこまりました」

金髪の青年の命令を受け、キルスは目礼して踵を返す。彼がこの場からいなくなると、金髪の青年が花音に手を差し伸べた。

「ほら、立て」

花音は一瞬迷ったが、素直に金髪の青年の手を取ることにした。花音が手を乗せると、強い力で引っ張り上げられる。

「許せよ。あいつは自分の職務に忠実なだけだ」

手を離しながら、金髪の青年が呟くように言った。

「職務？」

「あれは俺の護衛。最近城に入った暗殺者を捕らえてから神経質になっているらしくてな」

「あ、暗殺者！？なんでそんな物騒なの！」

「俺の命を狙ってるからだろ。最も、簡単にやられはしないけどな」

花音は、暗殺者やら命を狙うやら、普段耳にしない単語が出てく

ることに軽く違和感を覚えていた。
いや、彼らの言動だけではない。
雨の中にいたはずなのに、目を瞑った瞬間室内にいたのだ。こんなことなどありえるのだろうか。

「……ねえ、ここはどこなの？」

一気に不安になり力なくそう言うと、金髪の青年は花音の目を真っすぐに見て口端を上げた。

「ここはクロスレイド。俺の国だ」
「くろす……？俺の国……？」

反芻するだけで理解が追い付いていない様子の花音を見据えたまま、金髪の青年は不敵に笑った。

「俺はルディアス・クロスレイド――この国の王だ」

金髪の青年――ルディアスの言葉に、花音が思い切り叫んだのは言うまでもない。

act. 2

「うわあ……」

ルディアスの部屋に通された花音は、その豪華さと広さに圧倒されていた。

中でも目を引くのは、アンティーク調で揃えられた調度品の数々。一目見ただけで高価だとわかる代物ばかりだ。

大きな天蓋付きベッドは、数人が寝ても落ちることはないだろうし、きらきら光るシャンデリアは美しかった。

「随分と間抜けな顔をしているな」

ルディアスのからかうような台詞に、花音は自分がぽかんとした表情をしていたことにようやく気付き慌てて居住まいを正す。

ルディアスはそれを鼻で笑って、優雅な動作で椅子に座った。

（絶対今馬鹿にされたよね？）

なんとなく釈然としないが、そこは口に出さないでおく。

直後、ノックとともにキルスが部屋へ入ってきた。

「終わったのか？」

「は、こちらへはしばらく誰も近付けさせないようにしてあります。しかし、やはり城内では噂に」

「放っておけ。そのほうが好都合だ」

ルディアスはキルスから花音に視線をずらした。

「言っておくが、嘘をついたら即牢屋行きだぞ」

「失礼な、嘘なんかつきません！」

「はっ、どうだか――さあ、話せ」

ルディアスに促され、花音は緊張しながらこれまでのことを話し始める。

自分は日本の高校生で、光を見た気がして外に出たこと、雨の中傘を追い掛けていたら強風が吹いたこと、転びそうになり目を瞑ったらここにいたことなどをかいつまんで説明すると、ルディアスは腕組みをしてキルスに目配せした。

「お前はどう思う、キルス」

話を振られたキルスは、難しい顔でルディアスと花音を見比べる。

「……判断しかねます。ニホンやコウコウセイという言葉は聞いたことがありませんが、その光も気になりますし」

「伝承には“光に導かれし異界の乙女”とある。だが確固たる保証はないんだよな」

「……ねえ、日本とか高校生とか知らないって言ったけど、ここは本当に日本じゃないんだよね？」

確認の意味を込めて花音が二人の会話に割り込むと、ルディアスがそれに答える。

「先程も言っただろう、ここは俺の国だと。ニホンなんて国はここに存在しないんだよ」

「――っ！」

冷水を頭から浴びせかけられた気分とはこういうことなのだろうか。

もしやとは思っていたが、面と向かってそれを突き付けられるのは正直きつい。

――まさか、異世界に来てしまうなんて。

「花音、だったな。お前は異世界から来た以上、月女神の巫女の可能性があるが、証拠は何もない」

「……うん」

「だから、お前にはこのまま城にいてもらう」

「……は！？」

花音とキルスの声がまた重なった。思わずお互いに顔を見合わせるも、即座にキルスが目を逸らしたため、花音は内心むっとしながらルディアスに向き直る。

「ちょ、ちょっと待ってよ！私元の世界に帰りたいんだけど！」

「お前に巫女の可能性がある以上、帰すことはできないな。というより、世界を渡る術なんて俺は知らないぞ」

「そんな……！」

肩を落とす花音の横で、キルスが焦った様子でルディアスに進言する。

「確かに可能性はありますが、いささか早計すぎるのでは――」

「理由が必要か？俺がこいつを気に入ったからだ。……王の決定に異論はないな？」

流れるようなルディアスの台詞に花音とキルスは言葉を失った。
王としての権限の前に逆らえる者はいない。

「……あんたに気に入られたって嬉しくない」

花音が頭を抱えながらぽつりとそう零すと、ルディアスは喉の奥で笑い目を細めた。
キルスも観念したのかため息をついていたが、花音の呟きに眉を寄せる。

「小娘、先程から思っていたがお前陛下になんて口の聞き方を」
「なんであんたにそんなこと言われなくちゃいけないのよ。それに、私は小娘なんて名前じゃないし！」

花音がキルスに反発したところで、ルディアスが椅子から立ち上がった。

「二人ともその辺にしておけ。花音は面白いから特例だ」
「陛下……」

キルスは頭痛の種ができたとでもいうように額に手を当てる。
花音は話を変えるため疑問に思っていたことを聞いてみることにした。

「ねえ、さっきから出てる月女神の巫女って何のことなの？可能性があるとか言われてもさっぱりなんだけど」
「そういえば知らないとか言ってたな。なら、話してやるからよく聞けよ」

そこに座れ、とルディアスは花音に近い位置にある椅子を一瞥する。
花音はそれに腰掛けると、ルディアスの話に耳を傾けた。
ルディアスが治めるクロスレイドは、広大な土地と豊かな文化を持つ屈指の大国である。
また、月女神ロクティアが愛した地とされており、彼女への信仰は厚い。そのため、クロスレイドにはロクティアに纏わる伝承がいくつも残されている。
中でも、月女神の巫女の伝承は、知らない者はいないほど有名なものなのだそうだ。
「“光に導かれし異界の乙女、国に栄光と繁栄をもたらす。彼の者、漆黒の髪と瞳を持ち、異界の服を身に纏う。すなわち、月女神に愛されし巫女なり”――伝承の一説だ」
言葉を切り、ルディアスは腕を組んだ。
「俺は信心深いほうではないが、これだけは覚えている。幼い頃から童話として聞かされたせいもあるけどな」
「でも、私はそんな大層な力なんてないよ。髪の色とかだって、私の世界では普通のことなんだし」
日本人の多くは髪を染めていない限り黒であるし、制服もデザインは違えどどこにでもあるものだ。
「月女神ロクティアと同じなのですよ」
ふいに、キルスが口を開いた。

「私が？その女神様と？」
「ロクティアは黒き髪と瞳を持つ美しい女神だそうです。……色については、合致しています」
「……」

美しい、の件には敢えて触れないようだ。
自分の外見について褒められたいとは微塵も思っていないが、強調された最後の一言は余計ではないのだろうか。

「はいはい、どうせ私は美人じゃありませんよ。……って、ルディアスあんたも笑うな！」

花音はひそかに顔を背け肩を震わせていたルディアスをひと睨みした。ルディアスは笑いの波が収まると、ひとつ咳払いをして話を続ける。

「……とにかく、お前という存在が現れた以上、真偽の程を確かめる必要があるんだよ。お前が巫女ならば、我が国としては願ったり叶ったりだ」
「はあ……でも、違ったらどうするの？」

花音の質問にルディアスは何も答えない。花音は首を傾げたが、それ以上追及しなかった。

「とにかく、詳しいことは後だ。それまでお前は“候補者”として城にいてもらうからな」
「……はーい」

――こうして、花音は月女神の巫女“候補”として城に滞在する

ことになったのだった。

act. 3

ルディアスの部屋を出た花音は、キルスに連れられて廊下を歩いていた。
話し合いの前に人払いをしていたからか、すれ違う者は誰もいない。それゆえ目立つ心配はないのだが、問題は先を歩く青年である。
無言。その一言につきるほど、彼は話さないのだ。

（気まずい！……私絶対この人から嫌われてるよね。第一印象から最悪だったもん）

間者だと疑われ、無礼だと言われ、挙げ句少しだが口論までした。花音に肯定的ではないのは確かだろう。

（ルディアスを守るためなんだろうけど、もうちょっと優しくても……）

確かに、目の前にいきなり現れた人物など怪しいにもほどがある。花音が同じ立場でも疑ってしまうだろう。
しかし、花音が月女神の巫女候補と言われても、キルスは態度を一貫して変えないのだ。
花音も元から自分を巫女の器でないと思っているため、信頼できない気持ちはわからなくもないが、かといって邪見にされるのも嫌だった。

（態度はアレだけど、悪い人ではない気がするんだよね……試しに話しかけてみよっかな）

よし、と意気込み、花音は口を開こうとした――のだが。

「……ぶっ！」

突然キルスが立ち止まったため、花音は話す間もなく彼の背中にぶつかった。

慌てて離れると、キルスが呆れた様子で振り向く。

「何をやっている。ぼんやりするな」

「ごめん。……着いたの？」

キルスが視線で示したのは、目の前にある木製の扉だった。

キルスについていけとだけ言われ、行き先を知らされないままここまで来たが、一体この扉の向こうに何があるのだろうか。

「入れ」

扉を開け、キルスが中に入るよう促す。花音はゆっくり足を踏み入れた。

花音の目に飛び込んできたのは、クリーム色の壁に品の良い調度品達。ルディアスの部屋よりも幾分か小さいが、花音にとっては充分すぎる広さの部屋だった。

「わあ……ねえ、ここは何の部屋？」

振り向きつつキルスに声をかければ、彼は扉を閉めてから質問に答えた。

「お前の部屋だ」
「嘘！？ここが！？」

花音は目を見開いてぐるりと室内を見回した。普通の家庭に育った花音から見れば、この部屋は上等すぎる。
しかし、キルスはその反応を別の意味に解釈したようだ。

「不服か小娘」
「そんなわけないでしょ、いい部屋だったから驚いたの！部屋をもらえるなんて思ってなかったんだから」
「不本意だがな。仮にも候補者として滞在するのだから部屋は必要だろう」

淡々と語るキルスの眉間には浅く皺が刻まれていたが、花音は敢えて見なかったことにした。

「今侍女を呼ぶ。わからないことは侍女に聞け」

キルスはそれだけ告げると、さっさと部屋を出ていこうとした。
キルスがドアノブに手をかけたところで、花音は思い出したように彼を呼び止める。

「――ねえ！」

訝しげに振り返るキルスに、花音は笑顔を向けた。

「ありがとう」
「……ふん」

無愛想な返答を残し、キルスは静かに退室していった。

扉が完全に閉まってから、花音は部屋の一部を陣取るソファーへ足を向ける。窓に背を向けるような形だが日差しが届く距離にあるため、日中はとてもあたたかそうだ。
花音はソファーにそっと腰を下ろした。

「うわー、柔らかい！ここで昼寝したら気持ち良さそう」

言うないなや、花音は体を横に倒しソファーの上に寝転んだ。そのまま体勢を変え、ぼんやりと窓の外を見る。白い雲が青空の中をゆったりと流れていた。

「異世界、か」

小さな呟きは、広い空間に溶けて消える。

ルディアスとキルスの言葉は覆せない事実だろう。異世界などという言わば非現実的な状況。
最初こそ動揺したが、深く考えれば考えるほど気持ちが落ち込んでしまいそうで、花音はすぐに前向きにいこうと決意した。

「住む場所があるだけマシ。大丈夫だよね、きっと」

自分に言い聞かせるように呟き、目を瞑ったその直後。
静かな室内にノックの音が反響した。

「は、はい！」

慌てて体を起こし返事をすると、「失礼します」という声と共に誰かが入室してきた。

紺と白を基調にし、胸元にピンク色のリボンがついたメイド服のようなものを身に纏った可憐な少女。

彼女は花音と目が合うと、微笑みを浮かべて一礼した。

「はじめまして。花音様のお世話を仰せつかりましたアリアと申します。これからよろしくお願い致しますね」

「あ、えっと、こちらこそよろしくお願いしますアリアさん」

礼儀正しい挨拶に花音も思わずかしこまってしまう。すると、アリアは一度きょとんとした顔をしてからくすりと笑った。

「あら、私のことは呼び捨てにしていただいて結構ですわ。私は侍女の身なのですから」

「……じゃあ、お言葉に甘えて。早速だけど、お願い聞いてくれないかな？」

「はい、何なりと」

「ここのこと、少しずつでいいから教えてほしいの。さっきルディアスに少し聞いたけど、全然わからないから――」

「花音様は陛下を名前でお呼びしているのですか！？」

花音の台詞が終わるか終わらないかのところでアリアが心底驚いたように声を上げた。花音は目を丸くしてアリアを見る。

「う、うん。言葉遣いもこのままでいいって言われたから……もしかしてまずかった？」

よく考えれば、ルディアスは王であるとともにアリアが仕えるべき者である。それを簡単に呼び捨てにしたために気分を害したのかもしれない。

（せっかく仲良くなれそうだったのにこんなことで嫌われたくない！）

花音は内心不安に思いながらアリアの次の言葉を待つ。しかし、すぐにそれは杞憂だとわかった。

「なんて素晴らしいんですの！」

「……えええ！？」

若干興奮気味に詰め寄られた挙げ句手を握られ、花音は一瞬たじろいだ。少しだけ身を引くとソファーの背にぶつかる。

アリアは花音の様子を気にせず、目をきらきらさせていた。

「花音様、これは快挙ですわよ！喜ばしいことですわ！」

「ア、アリア、ちょっと落ち着いて」

とりあえず落ち着かせようと花音が声をかけると、アリアははっとして握っていた手を離した。花音も体勢を元に戻す。

「申し訳ありません、つい興奮してしまいました」

「ううん、いいよ。でも名前で呼ぶのがそんなに驚くことなの？」

「もちろんですわ！」

未だ興奮さめやらぬといった感じでアリアは話し出す。

「花音様は陛下のお名前お聞きになりました？」

「確か……ルディアス・クロスレイドだっけ？」

「ええ。ですが陛下にはもうひとつ名前があるのです」

アリアは手を頬に当て考えるような仕草をした。

「クロスレイドでは、王に即位すると呼称が与えられます。陛下は『零月王』。ですから、国民は陛下もしくは零月王と呼んでいるのですわ」

「れいげつおう……」

王の呼称は、月女神ロクティアになぞらえ必ず“月”が入っているらしい。しかもそれは自分で決めるのではなく、先代の王が最後の仕事として行うものなのだそうだ。

「それがどう関係しているの？」

「陛下はご自身が気に入られた方以外、下の名前で呼ばせないのですわ。もちろん即位前から関わりがある方々は除きますけど」

「……え？」

「ですから、名前を呼ぶことを許された花音様は、陛下に気に入られたってことですのよ！」

――そういえば、ルディアスは花音のことを“気に入った”と言っていた。

その証が、名前を呼ぶことやくだけた言葉遣いを許したことなのだろうか。

（喜んでいいことなのかなこれ……）

アリアがここまで言うくらいなのだから、これは滅多にないことなのかもしれない。だが、花音はその意味をまだ理解できていなかった。

「そうなんだ。でも気に入られるのがどうして快挙なの？」

花音がそう聞くと、アリアは目をぱちくりさせ何か言いたげに口を開こうとしたが、小さく首を振って曖昧な笑みを浮かべるに留めていた。

「理由は後々お話しますわ。まだ決まったわけではないのですから」
「……？」
「さ、花音様はお召し替えなさいませんと！準備をして参りますので少々お待ちくださいませね」

そう言って会釈し、アリアは足早に部屋から出て行った。最小限の音をたてて閉まった扉を眺め、花音は嘆息する。アリアは一体何を言おうとしていたのだろうか。
アリアといえば、ルディアスの話題が出るまではおしとやかな印象だったがどうも違ったようだ。だが、明るく接してもらえるのは素直に嬉しい。
この世界での知り合いは、俺様なルディアスと無愛想なキルスのみだったため、女の子の知り合いができるのは喜ばしいことだ。
そこまで考えたところで、アリアが大きな籠を抱えて戻ってきた。

「お待たせいたしました。お召し替えいたしましょう」
「……お召し替え？」

そういえば、先程そんなことを言っていたような気がする。どうやら聞き逃していたみたいだ。

「私別に着替えなくてもいいのに」
「そういうわけにはまいりませんわ。花音様が今お召しになっているものもお似合いですが、陛下のお言いつけですので」
「え、ちょ、ちょっとストップ！」

言いながら服を脱がしにかかるアリアを止めようとするも、彼女は安心させるように「大丈夫ですわ」と天使の微笑みを向けるだけで止める気はないようだ。しかし、花音にも羞恥心というものがある。

「じ、自分で着替えるからいいよ！」
「……お嫌ですの？」
「そういうわけじゃないんだけど、恥ずかしいんだよね……今までこんなことなかったから」
「直に慣れますわ。さ、ここは私にお任せくださいまし」

有無を言わせぬ物言いに、花音は口をつぐむしかない。

（ええい、もうなんでも来いだわ！アリアも女なんだから見られたって平気だし！）

腹をくくり、花音がアリアに「お願いします」と告げると、彼女はまたにっこりと笑って嬉しそうに返事をした。

＊

着替えを終え、大きな姿見の前に立つ姿はまるで自分ではないようだった。

足元まである真っ白なドレスは、シンプルながらも繊細な刺繍が随所に施され可憐なイメージを与える。結い上げられた髪には色とりどりの宝石がはまった髪飾りがつけられ、動くたびにシャランと鳴った。普段化粧っ気のない顔には、自然な薄化粧がされている。

「花音様、よくお似合いですわ！」

アリアが胸の前で手を組み心からの賛辞を花音に送る。花音は照れたように頬を掻くと、アリアに向き直った。

「でもこんな高そうなもの着ちゃっていいの？私お姫様とかそんなんじゃないし、お金なんて払えないよ？」

「クローゼットに入っている服やドレスはすべて花音様のものです。ご心配なさらなくても大丈夫ですわ」

「そうなの！？」

見るからに上等なものを見ず知らずの者に与えるなど普通は考えられない。

肌触りの良いドレスを見つめ、花音が価値観の違いについて考えていると、大きな音をたてて扉が開かれる。花音とアリアが驚いて部屋の入り口に目を向けると、そこにはルディアスが不機嫌そうな顔で立っていた。

「遅い」

一言だけ言い、遠慮なしに入り込んでくるルディアスに花音は眉をひそめた。

「ちょっと。あんたねー、女の子の部屋にノックもなしに入ってくるんじゃないわよ」

「知るかそんなこと。俺は王だぞ？敬え」

「嫌」

きっぱりと言い放つ花音をアリアは青ざめた顔で見守っていた。

誰がどう聞いても花音の言動は不敬罪に当たる。牢に入れられてもおかしくはない。
しかし、そんなアリアの心配はルディアスの表情を見た瞬間驚愕に変わる。彼の唇は弧を描き、おもしろそうに目を細めていたからだ。

「くくっ、この俺に楯突くなどお前ぐらいだぞ」
「そのままでいいって言ったのあんたでしょ」
「まあ、そうだが。やはりお前はおもしろいな」
「どういう意味よ」

花音がきっと睨みつけると、ルディアスはふんと鼻を鳴らした。馬鹿にされているようにしか思えない。しかし、このままでは言葉の押収にしかならないため続く言葉を飲み込んだ。

「それで、何か用なの？さっき話は終わりだって言ってたじゃない」

花音の台詞に、ルディアスは「ああ」と用事を思い出したようだった。

「後で俺の部屋に来い」
「……は？」
「聞こえなかったか？夜、俺の部屋に来い。返事は？――最も、拒否権などないがな」
「聞いた意味ないでしょそれ！まあ行くだけならいいけど」

花音の返事を聞いたルディアスは、不敵な笑みを浮かべながら身を翻し、開かれたままだった扉をくぐりぬける。やがてその足音が遠ざかっていくと、アリアはほっとしたように息を吐いた。しかし、すぐに慌てて花音の手を握った。

「か、花音様！いいのですかあんなに簡単に……！」
「え？なんのこと？」
「その……陛下のお部屋へ夜、お呼びされるのですよ？」
「どうせ月女神の巫女かどうか尋問じみたことされるんでしょ。大丈夫、言い返すから！」
「いえ、そうではなく……」

アリアは視線を彷徨わせたが、花音にひとつの可能性を告げることは止めておいた。そんなアリアを尻目に、花音はゆっくりと入り口の扉を閉めようとしていた。

act. 3（後書き）

花音とアリア、どちらの予想が正しいのか……？
それは次回ということで。

act. 4

空が夕暮れから夜の闇に変わりつつある頃、花音は自室のソファーにぐったりと身を預けていた。

「お腹苦しい……」

こうなった原因は先程済ませたばかりの夕食である。

まだ城内の者にも花音のことははっきりと知らされていないため、今日だけは自室で食事をすることになったのだが、アリアが運んできた料理の量が多かったのである。

「豪華ですごくおいしかったけど、さすがに食べすぎたかも……」

残せばよかったのだが、なんとなくもったいない気がしてできなかったのだ。

そんな花音を気遣うように食事が終わってからずっとアリアがついていてくれたのだが、現在彼女は侍女頭に呼ばれて部屋を出ている。その際、何か用事があればテーブルの上の鈴を鳴らしてほしいと説明されていたが、花音は胃が落ち着くまで何もする気になれなかった。

しばらく時間が経過しようやく花音が動けるようになったところで、アリアがノックとともに静かに部屋に入ってきた。その手には、着替えの入った籠を持っている。

「お体の具合はいかがですか？」

「もう大丈夫だよ。ごめんね、なんか残せなくて食べすぎちゃった」

花音が体を起こしながら謝ると、アリアは申し訳なさそうに首を横に振った。

「いいえ、花音様が謝ることではございません。さすがに量が多かったですものね……これからは少し減らすよう頼んでおきますわ」

「ありがと。……あれ、籠持ってるけどどうかしたの？着替え？」

アリアが抱えている籠を指差すと、彼女は「はい」と頷いた。

「入浴の用意ができましたので、お呼びしに参りました」

「え、本当に！？」

花音の表情がぱっと明るくなる。すると、アリアは微笑ましそうにくすりと笑った。

「ええ。今からお入りになられますか？」

「うん！入る入る！」

そう言って立ち上がるも、花音は何かを思い出したように顔をこわばらせた。

「……花音様？」

「あのさ……まさかお風呂ってアリアもついてくるの？」

「はい。私は花音様の侍女ですから」

当然だとばかりにすらすらと答えたアリアに、花音は思い切り脱力した。

（いやいやいや、お風呂は絶対一人で入りたいんだってば！）

その後、花音は渋るアリアをどうにか説得し、脱衣所に控えているという条件で一人で入浴できることとなった。

＊

「うっわー広っ！」

浴室に入った花音は、まずその広さに圧倒された。大きな浴槽からは湯気が立ち上り、獅子の頭を模した彫刻の口から絶えず湯が流れ出ている。シャワーらしきものは見当たらないため、陶器のような素材でできた風呂桶で体を流すのだろう。

花音はいい匂いのする石鹸で髪や体を洗うと、湯船に肩まで浸かった。湯の温度は熱すぎずぬるすぎず、ちょうどいいくらいだ。

背中を浴槽につけ、花音は大きく体を伸ばした。これまでの疲れがとれていくような気がして、花音は気持ちよさそうに息を吐く。

「んー、こんな大きなお風呂に入れるのは嬉しいけど、いつもここに一人じゃ寂しいなー」

ぽつりと呟きを零すと浴室内に声が反響する。一般人の花音と違って、国王であるルディアスはこの広さに慣れっこなのではないだろうか。

「そういえば、後であいつのとこ行くんだっけ……面倒だなあ」

最後の言葉と同時に、花音は口元までお湯に浸かる。ルディアスの部屋に行くことに対しアリアは何故か慌てていたが、何を心配し

ていたのだろうか。

「――花音様、終わりましたか？」

半透明なガラスを隔てた脱衣所からアリアの声がする。花音はもうそんなに時間が経っていたのかと、アリアに返事をし、湯船から上がった。

脱衣所に入ると、アリアがバスタオルを用意して待ち構えており、湯冷めを防ぐためてきぱきと花音の体を拭き始める。やんわりと自分で拭くと言ってみたが、アリアはこれだけは譲れないようで、花音は着替えが終わるまで羞恥心に耐え続けていた。

「お疲れ様でした」

着替えが終わり、アリアが一歩後ろに下がる。

花音が着せられたのは、着心地のいいゆったりとした夜着だった。これならば締め付けもなくよく眠れるだろう。

「あ、ありがと……」

「どうなさいました？お疲れの様子ですが」

「ううん、なんでもないの。それより、これからルディアスのとこに行こうと思うんだけど何か上着貸してくれない？廊下歩いてたら湯冷めしちゃいそうだし」

「はい、用意してありますわ。陛下のお部屋までは私が共に参りますので、迷う心配はありません」

花音は上着を受け取って羽織りつつ、アリアに感謝の言葉を述べる。花音に笑みを向けられ、アリアは心底嬉しそうな表情を見せた。

脱衣所を出た二人は、アリアの持つランプの光に照らされながら

歩いていた。廊下には花音とアリアの他に誰一人としていないようだ。ルディアスかキルスが命じたのかもしれない。
アリアと小さく雑談しながら進んでいくと、暗がりの中に誰かが立っているのが見えた。アリアがランプをかざすと、それは腕組みをしたキルスだった。

「キルス！？」

花音が駆け寄ると、キルスは腕組みを解いて右手を腰に当てた。

「なんでここにいるの？」
「……お前が来たら通すようにと陛下に命じられたのでな」

ぶっきらぼうに答え、キルスはアリアに下がるよう命じた。アリアは深く一礼すると、花音を気にしながら背を向けて去っていく。
それを視界の端でとらえながら、キルスは自身の後方にあった扉に近づいた。他の部屋よりより豪奢な扉は、一目で見ただけでここがルディアスの部屋なのだとわかる。
キルスはそれを数回ノックし、はっきりと口上を述べた。

「キルス・アルヴァーンです。月女神の巫女候補者をお連れしました」
「――入れ」

ルディアスの声が聞こえ、キルスが「失礼致します」と扉を開く。今まで暗闇にいたせいか室内の明かりが眩しく感じ、花音は一瞬目を細める。
そんな花音の背中をキルスが軽く小突いた。早く入れということなのだろうか。

「待ちくたびれたぞ。お前、この俺を待たせるなんていい度胸だな」
部屋に入るなり、ソファーに寄りかかるような格好で座ったルディアスからにやりとした笑みを向けられる。
「いい度胸も何も、お風呂入ってたんだからしょうがないでしょ。その前に、時間指定されてないから待ちくたびれたとか言われても」
「気を利かせようなどとは思わなかったのか？」
「だって何も言われてないじゃない。異世界から来た私がこの世界の常識について詳しいと思う？」
「……期待はしていなかったけどな。さっさとこっちへ来て座れ」
ルディアスが手で示したのは、自身が座るソファー。
（――隣に座れと？）
花音が胡乱げにルディアスとソファーを見比べると、彼は尊大な態度を崩さず、視線でもう一度同じ場所を示す。ルディアスの隣に座るなど気が引けるが、このまま立ち尽くしているわけにもいかず花音はしぶしぶそれに従った。少し間をあけて座る花音に、ルディアスは何も言わなかった。
「ねえ、どうして私を呼んだの？」
ルディアスは右手を顎に当て、じっと花音を見つめた。一瞬その瞳が蠱惑的な輝きを帯びたが、花音は何も気づかない。ルディアスは目をすがめると、花音に顔を近づけ低く囁いた。
「何故だと思う？」
「私が聞いてるんですけど。どうせ月女神の巫女かどうかみるため

なんでしょ？――って、顔近いんだけど！」

花音は居心地悪そうに身を引こうとしたが、ルディアスに腕を引かれ動けない。それどころか、距離が縮まった気さえする。

「ル、ルディアス……？」

「……」

恐る恐るルディアスの顔色を窺うと、彼は笑みを消しその端正な顔をさらに花音に近づけた。雰囲気が変わったことに動揺し、花音は頬を染めつつルディアスから離れようと身をよじる。ルディアスはそれを許さず、花音の顎に手を当てくいと上に向けさせた。

「ちょ、ちょっと！」

まずい。これは非常にまずい気がする。

焦りと恥ずかしさで動悸が激しくなってきたが、ルディアスは花音の様子にもかまわずゆっくりと距離を詰めてくる。

花音はとっさに息を詰め、ぎゅっと目を瞑った。

「――くっ」

互いの息がかかるくらいの距離で、ふいにルディアスが噴出す気配がした。

嫌な予感とともに花音が目を開けるのと同時に、ルディアスが肩を震わせながら離れていく。隠そうともしない低い笑い声と彼の表情を見て、花音は何が起こったのかを瞬時に悟り、先程までとは違う意味で真っ赤になった。

「か、からかったのね！？」

「くくっ、こううまくいくとは思わなかったけどな――おっと」
揶揄を含んだ声音に怒りがふつふつと湧き上がり、元凶に張り手をくらわそうとしたが、いとも簡単に止められてしまう。花音はささやかな反抗としてきっとルディアスを睨み付けた。
「馬鹿！変態！乙女の純情を返せ！」
「ふん、誰が乙女だって？しとやかさの欠片もないだろうが」
「きぃぃぃ、むかつく！」
鼻であしらわれ、花音は憤慨した様子で掴まれた手を振りほどいた。ルディアスは花音に構わず立ち上がると、部屋の隅にある本棚へと向かう。整然と並べられた本の中から一冊を取り出し、花音へと手渡した。古びた装丁の本の表紙には、見たことのない文字列が並んでいる。
「何これ？」
「月女神の巫女に関する本だ。読んでおけ」
「へえ……」
ルディアスに生返事をしながら最初の一ページをめくると、表紙と同じ文字が躍っていた。
文字自体は暗号にしか見えない。だが、何故か花音はそれを読むことができた。いや、理解できるといったほうが正しい。
（一体どうなってるの？頭に文章の意味が流れ込んでくるみたい……）
急に黙り込んだ花音を不審に思ったのか、ルディアスが話しかけてきた。

「どうした？」
「……なんでもない。ねえ、あんたが私を呼んだのってもしかしてこれを渡すため？」
「無知なまま候補などと名乗られても困るからな。ありがたく思えよ？」

台詞はどこまでも偉そうだが、自分のために動いてくれたことは事実である。花音は素直に礼を言い、ソファーから立ち上がった。

「本も受け取ったことだしもう戻るわ。それじゃ――」
「ああ、待て」

おやすみ、と言おうとした花音をルディアスが静止した。まだ何かあるのかと訝しげにルディアスを見やると、彼はとんでもないことをのたまった。

「今日はここで寝ろ」
「……はあああああ！？なんでよ！？」
「拒否権などない。安心しろ、誰もお前なんかに手を出さない」
「お前なんかとは何よ！」
「なんか、で充分だろ。貧相な胸してるくせに」
「……」

この失礼な男を一体どうしてやろうかと心中で毒づいていると、ルディアスが花音の手を引いた。そのまま誘導されベッドの傍まで来ると、「先に寝てろ」と手を離される。

「あんたは？」
「俺はまだ仕事がある。さっさと寝とけ」

ルディアスはそう言い置いて、花音を残し部屋を後にした。
残された花音は、呆然と閉まった扉とベッドを見比べる。
何故自室ではなくこの部屋で寝なければならないのだろう。ルディアスの考えはよくわからない。

「あー、もうなんでもいいや。疲れた……」

何かを諦めたかのようにひとつため息をつき、やわらかそうなベッドに潜り込む。上質な布団に優しく包み込まれながら、花音は元の世界へ思いを馳せる。
友人はあれからどうしたのだろうか。私がいなくなったことに気づいているだろうか。家族は心配していないだろうか。さまざまな疑問が浮かんでは消えていく。
花音は目を閉じ、枕に顔を埋めた。

「……帰りたい」

吐息とともに零れた言葉はわずかに震えていたが、それを聞くものは誰一人としていなかった。

act. 5

ルディアスが部屋を出ると、部屋の警護にあたっていたキルスが軽く頭を下げた。
話が終わるまで待てというルディアスの言いつけを律儀に守っていたのだろう。ルディアスは口端を上げ、彼の肩にぽんと手を置いた。

「不満か？」
「……何をです？」
「俺があの娘を呼びつけたことだ。まだ疑っているのだろう？」

月女神の巫女。花音がそれであれば、国内だけではすまされない大事になる。もしも違っていた場合、彼女の存在は不審なものでしかない。両極端すぎる可能性は、キルスに余計な猜疑心を抱かせているのだろう。

「……まったく疑っていないと言えば嘘になります。つい先日暗殺者が現れたばかりですので」
「寝首をかこうとして俺に返り討ちにされたけどな。だが、あいつにそんな器用な真似ができると思うか？自分の立場さえわかってないんだぞ」

この俺に張り手しようとしたしな、と続けると、キルスは思い切り顔をしかめて見せた。
どう考えても国王に対する態度ではない。それを罰するどころか黙認しているルディアスをキルスは不思議に思っていた。

「どうしてあのような態度をお許しになっているのですか？まして御名を呼ばせるなど前代未聞では？」
「言っただろう？おもしろいからだと。俺に意見する女など初めて見た。白粉を塗りたくり媚を売るだけの女どもと違ったからな」
「では、あの娘を信用なされると？」
「風呂に入っても髪の色は変わらず、近くで見ても何か仕掛けを施しているようには見えなかった。何も知らないのは確定だな。それに、あれに俺を陥れるような頭があるとは思えん。だろう？」

花音本人が聞いたら激怒するであろう言葉に、キルスはしばし押し黙った。
ルディアスの見解と花音の立ち居振る舞いを照らし合わせても同意できる部分が多いが、完全に納得できたわけではない。
そんな複雑な心境を読み取ったかのように、ルディアスはキルスから離れ、片手を腰に当てる。

「ま、巫女と確定するまではただの娘だ。信じるかどうかはお前が決めろ」
「……御意に」
「話は終わりだ。俺はもう寝るからお前も持ち場に戻れ」

身を翻し部屋へと戻っていくルディアスを黙って見送るキルスだったが、扉が目の前で閉まった瞬間大切なことを思い出した。
今しがたまで話題に上っていた張本人が出てこない。まさかとは思うが、このまま泊まるつもりなのだろうか。

「――いや、まだ話が終わっていないだけだろう」

そう判断し、キルスは持ち場に戻るため歩き出した。

花音を待つという考えも頭の隅を掠めたが、ルディアスに戻れと命じられた上、このまま待ち続けても時間の無駄だと思い引き返すことはしなかった。

＊

扉を閉めると同時に室内に視線をめぐらせると、ベッドに横たわり規則正しい寝息をたてている花音の姿を発見した。

「寝ているな……」

ルディアスは花音の顔が見える位置まで来ると、ベッドの端にゆっくりと腰掛ける。そして、ぼんやりと花音の寝顔を眺めた。

まだあどけなさの残る顔立ちの少女。容姿は十人並みだが、王である自分に恐れることもなびくこともなく、はっきりと物を言う。キルスは快く思っていないようだが、ルディアスはそれをむしろ評価していた。

「しかし、本当に警戒心が無い女だな」

ふと、ルディアスが花音の髪に手を伸ばした。肩まである黒髪はまだわずかに湿り気がある。何も考えず顔にかかる髪を払ってやると、花音の頬にうっすらと涙の跡があることに気付いた。

――泣いていたのだろうか。

ルディアスは指で軽く涙の跡をなぞり、小さく息を吐いた。

明かりを消し、自分も花音の横に寝転がると、何をするでもなく静かに目を閉じた。

＊

「ん……」

水の中から浮上するように、ゆっくりと意識が戻ってくる。

もう少しこの心地よいまどろみに身を委ねていたい。そう思ったが、目蓋の裏に光を感じゆっくりと目を開けた。

視界に入り込んできたのは見慣れない光景だった。朝日がカーテンの隙間から零れ落ちている。どうやら窓の方向に体を向けて寝ていたらしい。

起き抜けの頭で一生懸命考えた結果、花音は昨日の出来事を思い出すに至った。

「あのまま寝ちゃったんだ……あいつ、結局どこいったんだろ」

いつ眠りに落ちたのかも定かではないが、少なくとも眠るまでルディアスは戻ってこなかった。仕事が終わらなかったのだろうか。

そう思いつつ、花音は体を起こそうとした。しかし、何故かぴくりとも動かない。

また、体に感じる重みと背中のぬくもりに違和感を抱き、視線を下にずらしていく。

背後から、腹部に腕が回されていた。

（――っ！？）

それを見た瞬間、花音は一気に覚醒した。

何が起こっているかを確かめるため、おそるおそる振り向いてみると、すぐ傍にルディアスの顔があった。

（な、な、何これえええっ！？）

花音は、ルディアスに抱きしめられるような格好で寝ていたのだ。顔を真っ赤にしたまま腕を外そうと躍起になってみるも、なかなか外れてくれない。

それどころか、花音がもがくたびに腕が腹部に食い込んで非常に苦しい状態になってしまっている。

（なんで外れないの！痛いし！もう、蹴飛ばしてやろうか！）

焦りも手伝ってそう考えついた瞬間。

花音の耳元に、ふうと息が吹きかけられた。

「ひっ！？」

小さく悲鳴を上げ思わず体を強張らせると、後方から軽く噴出す音が聞こえた。

（――まさか）

嫌な予感とともに顔を振り向かせた先には、笑みを顔面に張り付かせたルディアスの顔があった。瞳は完璧に花音をとらえている。

「ルディアス！あんたいつから起きてたの！？」

「お前が目覚める前からだが？」

さも当然といったように平然と答えるルディアスに、花音は叫ぶように声を荒げる。

「あ、あんたねえええ！狸寝入りなんかしてないで言いなさいよ！」
「言ったらつまらないだろ。お前の反応、おもしろかったぞ？」
「おもしろがるんじゃない！いいから離してよ！」

自分の体に回されたままだった腕をどかそうと手をかけた花音だったが、それを阻むようにルディアスが腕の力を強める。

「断ると言ったら？」
「思いっきり蹴飛ばしてやる。それか頭突きする」

そう言って睨み付けると、ルディアスは鼻を鳴らしたものの意外にもすんなり腕を解いて花音を解放した。花音はすぐさま起き上がりルディアスから距離をとると、ほっと息を吐く。ルディアスは未だベッドに寝転がったままだ。

「……起きないの？」

何となく疑問を口にすると、ルディアスは枕に肘をつき意味ありげに笑う。

「お前、この状況を何とも思わないのか？」
「え？別に何も思わないけど」
「くくっ、おもしろいことになりそうだな」
「……？」

投げかけられた質問に答えないまま口を閉ざすルディアスに、花音は不思議そうに首を傾げた。
おもしろいこと。一体ルディアスは何を考えているのだろうか。

（ま、私には関係ないことだよね）

考えるのが面倒になった花音は、ベッドの端に座り軽く体を伸ばす。

そのとき、控えめなノックの音が部屋に響いた。どうしたものかと花音がルディアスに目をやると、彼は扉の方向を見ようともしないまま「入れ」と告げる。

入室してきたのは、アリアと同じ格好をした侍女だった。

「おはようございます陛下。朝食の支度が――」

突然、侍女が口を閉ざした。

どうやら絶対にいるはずがない花音の姿を認めたらしく、やがて慌てたようにきょろきょろと視線をさまよわせ始める。花音は何故侍女がうろたえているのかがわからず、怪訝そうに声をかけた。

「あの……」

「し、失礼致しました！」

声をかけた瞬間、侍女が顔を真っ赤にして部屋を飛び出していった。遠ざかっていく足音を聞きながら、花音はぽかんとした表情でルディアスを見る。彼はゆっくりと体を起こし、喉の奥で低く笑った。

「やはりな」

「は？」

「あの侍女。どうやら誤解しているようだぞ」

「誤解？誤解って――」

何、と続ける前に、花音ははたと何かに思い当たる。

朝、ルディアスの部屋、ベッド、自分とルディアスの格好。これらから導き出される答えに花音はさっと顔を青くさせた。

「ま、まさか……最悪の勘違いされた！？」

「どうだかな」

「さっきの反応見りゃ一目瞭然でしょうが！ああもう、あんたの言う通りになんかするんじゃなかった！」

悔しげに文句を言いながら、花音はベッドを降りて足早に部屋の扉に向かう。ルディアスはその姿を目で追いつつ口を開いた。

「どこへ行く？」

「さっきの人追いかけるの！誤解を解かないと！」

早口に答え、花音は慌しく部屋を飛び出した。扉が音をたてて閉まり、次いで大きな足音がルディアスの耳に飛び込んでくる。

ルディアスは乱れた髪を無造作に掻き上げぽつりと呟いた。

「まったく騒がしい奴だな。寝ている間は静かだというのに」

ルディアスは花音が去った方向を見ながら唇を弧の形にし、重大なことを口にした。

「正式にあいつの存在を発表していなかったが……まあいいだろう。手間が省けた」

――ルディアスの予想通り、この一件で花音は城中にその存在を知られることとなった。

ちなみに、花音が必死に説明したおかげか、なんとか誤解は解く

ことができた。
その代わり、侍女たちの間で密かに王のお気に入りと噂されるようになったが。

act. 6

「まったく、お前は何を考えているんだ！よりにもよって陛下の部屋で一夜を明かすなど……！」
「だーかーらー、不可抗力なんだってばー！」

朝食後から延々と続くキルスの説教。
侍女の誤解が解けたと思ったら、今度は話を聞きつけたキルスが激怒して花音の部屋にやってきたのである。その場にいた者曰く、彼は青くなったり赤くなったりせわしない状態だったらしい。
それはともかく、現在の状況は花音にとって迷惑以外の何物でもなかった。
ちなみに、元凶はこの場におらず遅めの朝食を満喫しているようだ。なんとも腹立たしい。

「文句ならあいつに言ってよ！私はどっちかっていうと被害者なんだから！」
「言えるならば当の昔に言っている！だからこそ腹立たしいのだ！」
「思いっきり八つ当たりじゃん！」

何故自分がこれほどまでに責められなければならない。
王とその護衛という上下関係があるにせよ、ルディアスへの文句を自分にぶつけられるのは筋違いというものだろう。
しかし、誤解が早いうちに解けたのは本当によかったと思う。噂に尾ひれなどつけられてはたまったものではない。

「――そういえば、あんたルディアスの傍にいなくてもいいの？護衛なんでしょ？」

キルスを見ていて思い出したことを口にすると、彼はぴたりと動きを止め、大きくため息をついた。

「もちろん普段は食事にも同行している。お前の騒動のせいでできなかっただけだ」

「じゃあ今からでも行けばいいんじゃないの？」

「……それもできるなら当にしている。だが今日は食事が済んだらすぐに会議が入っているからな」

「会議には出席しないの？」

「――私は立ち入ることはできない。立場上出席は許されていないのだ」

浮かない表情のキルスに、花音はただ首を傾げることしかできない。

しかし、立場の相違が大きな影響を及ぼしているのだということには、薄々ではあるが気づいていた。

＊

「では、税収の内訳を読み上げます」

同時刻、城の会議室。

部屋の中心にある木製の大きな円形テーブルを囲み、十数名の男達が会議を続けていた。

一段高く作られた上座に備え付けられた椅子には、ルディアスが

片肘をついて座っている。その表情はなんともつまらなそうだ。
会議の大半は元老院と呼ばれる男達によって進行される。壮年から老齢の者までさまざまであるが、皆一様に身分は高い。国の中枢の担うため、優秀な人物を選出した結果だという。確かに彼らは優秀ではあるのだが、頭の固い連中が揃ってしまったことが難点だろう。
元老院の一人が手元の書類を淡々と読み上げている。ルディアスは元老院全員に目を配りながらも、それにじっと耳を傾けていた。
「――以上です。今月は少々多いようですので、アリエスへの援助へまわしたいと思うのですがよろしいでしょうか」
アリエスとは、王都から北へ進んだ場所にある小さな村である。豊かな自然に囲まれたのどかな村であるが、先日そこで土砂崩れが起きた。長雨のせいで地盤が緩んでいたらしく、被害は大きい。その復興支援へ資金をまわしたいというのだろう。
「わかった、許可する。資金援助だけでなく救援部隊の手配もしておこう」
ルディアスがそう言うと、男は「ありがとうございます」と軽く礼をした。
「これで今日の議題はすべて終わりだな？」
「ええ。ですが、陛下に少々お聞きしたいことがございます」
先程と違う壮年の男が口を開いた。ルディアスは怪訝そうに彼に視線を向ける。
「……なんだ？」

「昨日現れた少女のことです。我々は詳細な説明を受けておりませんが……彼女は真に月女神の巫女なのでしょうか」

それは元老院という立場でなくても気になっていたことだ。
突然現れた伝承通りの外見を持つ少女は、本当に月女神ロクティアが遣わした人物なのだろうかと。
元老院全員の視線がルディアスに集まる。ルディアスはほんの少し沈黙を保った後、ついと口端を上げた。

「そうだな……月女神の巫女の可能性は高い。だが、確固たる証拠はない。よって候補として城に滞在させることにした」
「で、ではもしも彼女が本物だとしたら……」
「我が国は安泰ですな！」
「――しかし、彼女が偽者だとしたら陛下はどうなされるおつもりか」

憶測が飛び交う中で、一番老齢の男が静かにルディアスへ質問を投げかけた。

「巫女でないなら彼女はただの娘も同じ。城へ滞在させておく理由はございませぬ」

ルディアスはわずかに目を細めた。
この男は、花音が月女神の巫女でないなら追い出すべきだと言っているのだろう。もしくは相応の対処をすべきだと。

「確かに証拠がない限り本物とはいえないだろうな。その点あいつは今無力な娘にすぎない」
「でしたら――」
「ではお前は巫女の可能性がある娘を泳がせておけとでもいうのか

？」

ルディアスが続く言葉を遮り問うと、老齢の男は答えられず押し黙る。

それに軽く笑い、ルディアスは椅子からゆっくりと立ち上がった。

「何にせよ、あいつはこのまま城に滞在させる。本物でもそうでなくてもだ。いいな、これは決定だ。零月王の名において」

王命を前に、男達はただ頭を下げるしかない。

ルディアスはその光景を眺めた後、身を翻して会議室を後にした。

＊

「労え」

突然部屋の扉を開けて入ってきた一国の主は、花音を視界に入れると同時にそう言った。

「……は？」

ソファーの上でくつろいでいた花音が呆気にとられているにも関わらず、ルディアスは遠慮なしに部屋の中を進み、あいた椅子に腰を下ろす。

「労え、と言ってるんだ。俺は会議で疲れた」

「そんなの知らないわよ。あんたのせいで私は大変な目にあったんだからね。誤解は受けるし、キルスからは怒鳴られるし」

「国王と一時でも噂になったんだ。むしろ光栄に思うべきだろ」
「誰がそんなこと」

花音はそれだけ言うと、ぷいと顔を背け傍らに置いてある本を手に取り読み始めた。ルディアスを追い出すつもりはないものの、労えという彼の言葉は無視することにしたらしい。

ルディアスは何も言わず花音の手元の本に目を向けた。昨夜自分が渡した月女神の巫女に関する書物に間違いないだろう。だが、ルディアスはひとつ疑問に思うことがあった。

「お前、文字は読めるのか？」

ルディアスの言葉に、花音は顔を上げ困ったような表情をした。

「読めるみたい。というより、わかるって言ったほうが正しいかも」
「どういうことだ？」
「うーん、なんて言えばいいんだろ……文字はわかんないんだけど、その意味が頭に入ってくるっていうか。だから、一応本は読めるんだけど字は書けないんだよね」
「書けない、か……」

花音の説明を聞いて、ルディアスは椅子の背もたれから身を起こすと何やら考え事をし始める。それに首を傾げる花音だったが、ルディアスが何も言わないため、放っておくことにした。

しかし、読書を再開させたのも束の間、ルディアスが花音の名前を読んだ。

訝しげにそちらを見やると、何かを思いついたような瞳と視線がかち合った。正直、嫌な予感しかしない。

「……何？」

「お前、巫女と確定するまでどうせ暇だろ？だったら字を覚えろ。明日から教育係をつけてやる」
「教育係！？いや、字は覚えなきゃいけないからありがたいんだけど、なにもそんな大げさなものつけなくても」
「字だけでなく、お前に最低限の知識をつけさせるためだ。会話が成立しているところからみると言語は問題なさそうだが、字が読めるだけでは暮らせないだろう」
「……確かにそうかも」

花音は合点がいったように頷いた。
クロスレイドという異世界の国に来てしまった以上、その場所の文化に馴染んでおかなければさまざまな面で支障をきたすことだろう。この世界では、何も知らない赤子同然。知らなければならないことは山ほどある。
郷に入っては郷に従え、だ。

「しばらくここでお世話になるわけだから、ちゃんとこの世界のこと勉強しないといけないよね」

誰に言うでもなくそう呟く花音に、ルディアスはわずかに口端を上げた。

「ふん、殊勝だな。俺への態度もそうであればいいんだが」
「つまり敬意を払えってこと？……ルディアス様、どうかこの私にお慈悲をお与えください、とか？」
「やめろ、気持ち悪い。寒気がする」
「あんたが殊勝な態度とれっつったんでしょうが！言われなくてももうしないわよ！」

あまりの物言いにむっとした花音がルディアスに手近にあったク

ッションを投げつけるも、ルディアスはそれを片手で受け止めた。
それから、にやりと笑ってクッションを投げ返す。
ふいをつかれた花音はそれを顔全体で受け止めた。クッションはすぐに床へと落ちる。
花音はそれを無言で拾い上げると、ルディアスに不平をぶつけようと顔を上げた。

「あ、あんたね――」

言葉は、途中で止んだ。いつの間にか、ルディアスが目の前に来ていたからだ。
何も言わずに見下ろされ、ソファーに座る花音は居心地悪く視線を泳がせた。

「な、何。クッションぶつけたのそんなに嫌だったとか？でも今反撃」
「お前はそのままでいい」

遮るような言葉に、花音ははっとしてルディアスを見る。
ルディアスは小さく息を吐くと、花音の顎を右手でくいと上向かせ、妖艶に笑った。

「俺になびかない態度を気に入ったのだからな」
「ちょ、ちょっと……」
「だが、いずれ手懐けてやる。お前を手懐けるには少々骨が折れそうだが……面白そうだ。楽しみにしているんだな――花音」

低く囁き、するりと頬を撫でる。
一連の行動に固まっている花音に対し、ルディアスは満足そうな笑みを浮かべると、踵を返して部屋を出ていこうとする。花音がよ

うやく我に返った頃には、扉は半分閉まりかけていた。
それが完全に閉まりきる前に、花音は咄嗟にクッションを掴んで扉へと投げつける。
「あ、あんたなんかに手懐けられてたまるかあああ！」
クッションは、扉に当たって静かに床へと落ちる。
しかし、花音の叫びは去っていくルディアスの耳にしっかりと届いていた。

act. 6（後書き）

久々すぎる更新ですみません；
そして今回は少し長くなってしまったかもしれませんね。
ルディアスの最後の台詞は、今の段階では恋愛ではないです。
“まだ”ですけど（笑）

act. 7

花音がクロスレイドにやってきてから、今日でちょうど一週間が経つ。

最初は戸惑っていた城内の生活にも、少しずつ慣れ始めていた。月女神の巫女候補という肩書きがあるにせよ、正式に巫女だと認められたわけではないため、現在は客人と同様の扱いとなっている。そのため、花音に仕事などが与えられることはなかった。

かといって、暇かと問われれば実はそうでもない。ルディアスが先日教育係をつけてくれたためだ。

教育係として花音の前に現れたのは、リューレという背の高い男性。さらさらの銀髪に紫色の瞳をしており、顔立ちは整っている。物腰はやわらかく、容姿と相まって王子様を連想させるような人だった。

彼は研究者で頭の回転が速く、話も丁寧でわかりやすい。研究者としての立場も上位なのだが、困ったことに彼にはひとつだけ欠点があった。一度仕事を始めると他のことが眼に入らないかのように没頭するが、彼はそこに至るまでが長い。そう、いわゆるサボリ癖があるのである。

しかし、どういうわけか花音の教育係という仕事は一度もサボることがなく、彼の性格を知る者は皆首を傾げているという。そのため、花音はルディアスだけでなく彼にも気に入られたのではないかとの噂が流れているらしかった。

「リューレ、終わったよー」

文字の書き取りを終えた花音がソファーに座るリューレの名前を呼ぶ。
花音が机に向かってから、約三十分。文字を教わるのはこれで五回目のため、今回リューレは終わるまで待機という形になっていた。

「ん？どれどれ？」

リューレはソファーから立ち上がると、花音の傍へと移動し手元を覗き込む。
書き取りが終了したことを確認すると、リューレはその紙を手に取りざっと眺めた。

「……うん、いいね。もう少し練習すればもっとよくなると思うよ。がんばったね」

にっこりと微笑み、リューレは花音の頭を優しく撫でた。
花音はくすぐったそうに目を細めると、すぐにリューレの手を頭の上からどかす。それを見たリューレは残念そうな表情で手を引っ込めた。

「もう少し撫でさせてほしかったな」
「だって、こうしないと気が済むまで撫でてるじゃない。それにちょっと恥ずかしいし」
「そうだね、最初は黒髪なんて見たことがなかったから触ってみたんだけど。今は触り心地が良くてつい、ね」
「触り心地……」

花音は自分の髪を一房摘み、軽く首を傾げた。
特別な手入れなどしていないはずなのだが、リューレは自分の髪に触れるのが心地良いと言う。日本人ならば珍しくもない黒髪は、

この世界では非常に貴重なもの。しかし、触り心地に関しては当てはまらないのではないだろうか。

（アリアとか侍女さん達の髪も触らせてもらったけど、みんなさらさらだったしね。ていうか、見た感じリューレのほうが触り心地良さそうなんだけどな）

そんなことを考えてながらリューレの髪をじっと見つめていると、彼は花音の視線に気付き悪戯っぽく笑った。

「触ってみる？」

「へ？」

「僕の髪を触りたいのかなって。花音ならいいよ」

「え、本当にいいの？」

そう口にすると、リューレはくすりと笑って花音の傍らで片膝をついた。

俯きがちに目を伏せるリューレはやはり美形だと思う。その彼が髪を触らせてくれるというのだ。役得といえば役得である。

（でも、ちょっとためらっちゃうよね……女の人ならまだしも、男の人だし。でも、せっかく触らせてくれるって言ってるし無碍にはできないよね）

花音は考えるようにしばらく手を彷徨わせたものの、リューレの言葉に甘えることにし、意を決して少しずつリューレの髪に手を伸ばす。しかし、伸ばされた手は何も触れることができなかった。

「……え？」

「俺の所有物に色目を使うとは、いい度胸だなリューレ」

リューレに向かって伸ばしたはずの手は、いつの間にか部屋に入ってきていたルディアスによってとらえられていた。きょとんとした表情でつかまれた手を見れば、ルディアスはやや不機嫌そうに眉をひそめ、次いでリューレを見下ろした。

リューレはルディアスを振り仰ぎ、困ったような表情で立ち上がった。

「困りましたね。彼女に色目を使ったつもりはないのですが」

「どうだか。いいか、こいつは俺の所有物だ。勝手に触れるな」

「……ちょっと何言ってんの！？私はあんたの所有物じゃないから！」

尊大な物言いをするルディアスにむっとし、花音は勢い良く手を振りほどく。ルディアスはその扱いにも既に慣れたのか、何も言わずに笑みを浮かべる。しかし、そんな二人の様子を初めて目の当たりにしたリューレだけは驚きの表情をみせていた。

「花音、君はすごいんだね」

「へ？」

「……いや、なんでもないよ。それより陛下。何故こちらに？」

何故すごいのかがわからず首を傾げる花音の頭を、リューレは苦笑しながらゆっくりと撫でる。そして、ルディアスに向き直った。

ルディアスはリューレの行動に再度眉をひそめるも、先に用事を片付けることにしたようだ。

「今の行動の処遇は後回しだ。一昨日お前に預けた書類のことで話がある」

「書類、ですか？あれは明日神殿のウィゼス様のもとへお届けする

つもりでしたが……」

リューレがそう言うと、ルディアスは「そのことなんだが」と腕組みをした。

「気が変わった。ウィゼスのところへは俺が行く」

「陛下が？」

「書類の内容を見たならわかるだろう？それが月女神伝承に関する内容だと」

自分には関係なさそうだとぼんやりとペンを弄んでいた花音だったが、月女神という単語が聞こえた途端、手を止めて二人の会話に耳を傾ける。

月女神伝承に関する内容とは、どういうことだろうか。

「承知しております。月女神伝承についてお詳しいのはウィゼス様ですからね」

「ああ。お前も知っての通り、花音は月女神の巫女候補だ」

ルディアスがちらりと花音を見る。つられてリューレも花音を見れば、花音はこちらを向いて不思議そうな表情をしていた。

リューレはそんな花音に笑いかけた後、ルディアスに向き直った。

「ええ、だからこそ僕は彼女の教育係に任命されたのですから」

「字も書けないようじゃ話にならんからな。最低限の知識がなければたとえ本物だとしても使えない」

字を読むことは最初からできるようだがな、とルディアスはそこでいったん言葉を切り、ごそごそと懐を探り始めた。ややあって取り出されたのは、紫色の小さな球体。花音からすればただのガラス

玉にしか見えないそれは彼らにとって重要な意味を持つものらしい。隣でリューレが息を呑む音がした。

「それは……まさか、魔粒子？」

「まりゅうし？」

聞き覚えの無い単語に花音が首を傾げると、その言葉を拾ったリューレが簡単に説明を加えてくれた。

魔粒子とは、魔力を凝縮し固めたもので、高位の魔術師のみが生成できるものである。主に戦闘時に用いられ、地面に叩きつけるなどして割ると魔力が暴発し、魔力をもたない者でも簡単に魔法を使用できるのだという。しかし、非常に危険性が高いため、一般人はその存在を知らない。いわゆる国家機密のようなものである。

「ちょっと待ってよ、じゃあなんでそんな危険なものがここにあるの！？」

そんなもの持ってこないでよ、と花音は椅子から立ち上がりルディアスから距離をとる。

ルディアスはそんな花音に「馬鹿か」と一瞥をくれると、魔粒子を手の平にのせリューレの前に差し出した。

「これは今朝俺のところに届けられたものだ。俺宛の手紙と共にな。……魔粒子の用途がひとつだけでないことは、お前も知っているだろう」

そう言うや否や、ルディアスは魔粒子に向かって何事かを呟いた。その呟きに呼応するように、魔粒子は光を放ちながらその姿を変えていく。やがて光が収束したのち、ルディアスの手の平にあったものは魔粒子ではなく、別のものだった。

「……ペンダント？」

リューレの呟きを受け、花音はそろそろとルディアスに近づいていく。

それは、三日月を模したペンダントだった。

「かわいい……じゃなくて！なんで魔粒子がペンダントになっちゃうのよ！？」

魔法が当たり前に存在することは教わったし、日常生活に魔法が取り入れられていることも知っている。一週間の間、帯剣した騎士やらメイドやらを何度見たかわからない。

（それでもさ、目の前で魔法使われるのにまだ慣れないんだよ！）

そんな花音の心中を知らないルディアスは、やれやれとばかりにため息をついた。

「お前、話を聞いていなかったのか？」

「ちゃんと全部聞いてたよ！物騒なものだって言うからかまえてたのに、ペンダントになっちゃったし」

「……魔力に関するモノを封じる入れ物。魔粒子を用いるとは……なるほど、あの方も考えられたものだ」

状況を理解したのか、リューレは苦笑し肩をすくめる。

花音は理解していないのが自分だけだということを知り、焦ったように二人を見比べた。

「えっ！？私だけ置いてきぼり！？全然わかんないんだけど！」

「少しは考えろ、馬鹿。俺にこんな魔粒子（モノ）を送るのは国家機密を知る一部の者しかいないだろうが」

花音はルディアスの言いようにむっとしたが、確かにその通りなため反論はしなかった。

ルディアスとリューレの話からわかったこととといえば、魔粒子のことと、相手は味方であるということ。そして、その用途が一般的でないということだった。

「送るモノ――そうだな、できれば魔力がこめられたものがいい。それを自身の魔力で包み込み、魔粒子とする。魔粒子の使用方法は破壊することだが、このように中にモノが入っている場合、魔力の暴発とともにそれは吹き飛ぶ」

「中身を取り出すためには、先程の陛下のようにある呪文をとなえなければならないんだよ。表立った抗争がない現在（いま）、ペンダント――しかも“月”のペンダントなんかを魔粒子に入れて送ってくる人なんて、僕の知る限りひとりだけ」

「えっ、リューレも知ってる人なの！？」

「当然だよ。これを送ってきたのは――ウィゼス様なんだから」

よくよく話を聞くと、ウィゼスという人物は老齢の男性で、神殿の神官長の任に就いており、月女神伝承に詳しいのだという。彼は月女神の巫女候補が現れたという報告を受け、一度花音に会ってみたいという内容の手紙を送ってきたそうだ。月のペンダントは、ウィゼスの気遣いなのだとか。

（気遣い、か……嬉しいけど、見ず知らずの私になんでこんなのくれるんだろ。候補、だからかな）

花音はルディアスからペンダントを受け取り、早速それを首にか

けた。
一週間、よくわからないまま毎日を過ごしてきた。月女神の巫女候補としては何もしていないし、もちろん自分が本当に月女神の巫女なのかもわからない。
（でも）
ウィゼスに会うことで、何かが変わる――そんな気がした。

act. 8

花音がウィゼスのいるリース神殿へと赴くことになったのは、ルディアスが手紙を受け取った日から三日後のことだった。

もちろん花音だけで神殿に向かうことはできないため、ルディアスとキルスが同行するのだが、通例ならば国王であるルディアスが動くことはない。立場からすれば、むしろウィゼスが城へ出向くのが当然である。

しかし、そうならないのはこの訪問の目的が目的だからであろうか。

花音という存在の認知度は、未だ城内にのみとどまっており、公にはなっていない。不確定要素を表に出すことは危険だからである。しかし、花音が月女神の巫女であるという確証を得るためには自分達だけでは心許ない。そのためにウィゼスに協力を要請し秘密裏に事を進めようとしたのだが、リース神殿に保存されている月女神伝承に関する書物などは城に持ち込むことができず、ウィゼス自身もなかなか神殿を離れられないため、結果としてこちらが訪問するという形になった。

リース神殿は徒歩で行くには遠く、かといって馬車を使うほどでもない。そのため今回の移動手段は馬に決定したのだが、ここで問題がひとつ。

花音は馬に乗れないのだ。本物の馬を見たことすらないのだから当然であり、単独での騎乗は無理ということになる。

そうなると、誰かの馬に乗せてもらう他ないのだが――

「だからって……なんであんたとなのよっ！！」

半ば叫ぶように言いながら花音が指差した先には、今まさに鐙に足をかけようとしているルディアスの姿。ルディアスはその声を背に受けながら慣れた様子で馬の背に乗り、手綱を握りながらこちらを見下ろした。

「つべこべ言わずに早く乗れ。出発が遅くなるだろうが」

「……わかった。それよりさ、これどうやって乗るの？」

乗ったことがないからわからない、と花音は馬の鼻先を撫でながら馬上のルディアスを見上げた。

ルディアスの愛馬だという美しい毛並みの白馬。優しい性格なのだろう、初めて会うはずの花音にも大人しく体を触らせている。金髪碧眼のルディアスと相まって、まるで一枚の絵のようだ。

（かっこいいんだけどなぁ……でも性格がなー）

そう思いながら花音がルディアスをじっと見つめていると、ルディアスは眉をひそめてこちらを見下ろした。

「なんだ？アホ面してないで早く乗れ」

「ちょっと、アホ面って何！？それに乗り方がわからないってさっきから――」

「――おい、小娘。余計なことで陛下のお手を煩わせるな」

不毛なやり取りに痺れを切らしたのか、キルスが後方から花音の頭を鷲づかんだ。彼はどうやら一連の流れを黙って見守っていたらしい。花音は突然のことに一瞬びくりと体を震わせたが、すぐに頭上の手を振り払いキルスに向き直った。

花音の恨みがましい視線を受け、キルスはため息をつく。そして両手を腰に当てながら口を開いた。

「いいか、百歩、いや千歩譲ってその口の利き方は良いとしてもだ！陛下はお忙しい身でありながらお前のために時間を割いてくださっているんだ。余計なことで時間をとらせるな」

「そ、そうだけど。でもさ、ちょっと見てただけなのにアホ面って」

「陛下に対して敬意を持たないからそのような評価になるのだ」

「何それ……」

ふん、と鼻をならして腕組みをするキルスと不満そうな表情で彼を見る花音。それを馬上から眺めていたルディアスは、口端を上げにやりと笑った。

「そうだな。この俺をあんた呼ばわりするのはお前だけだしな、花音？」

ルディアスのからかうような台詞に、花音は頬を膨らませた。

「う、うるさい！第一、そのままでいいとか言ったのはルディアス（あんた）でしょうが！」

「ふん、まあな……キルス、そろそろ発つぞ。準備をしろ」

花音の言葉を軽く受け流し、ルディアスはキルスに顔を向けた。キルスは軽く礼をすると、自分の馬を連れてくるため馬屋に戻っていく。それをただぼんやりと見ていた花音だったが、ルディアスに声をかけられそちらに視線を向ける。

視界に入ったのは、ルディアスがこちらに向かって手を差し伸べている姿だった。

「え……？」
「え、じゃない。乗り方がわからないと言ったのはお前だろうが」
主語がないためわかりにくいが、これは手を貸してくれるということなのだろうか。
そう考えた花音はわずかに逡巡したものの、やがて覚悟を決めてルディアスの手をとった。
次の瞬間、急激な浮遊感が花音を襲った。何が起こったのかを理解したのは、ルディアスの手によって馬上に引っ張り上げられた後のこと。
「わ……」
馬上という不安定な場所ゆえかなかなか体勢を整えることができず、花音の口から小さく悲鳴のようなものが上がる。ルディアスは自分の前に座る花音の腰に腕を回し、ぐっと自分の方に引き寄せた。
身じろぎすれば、花音の背中がルディアスの胸板にあたる。ルディアスに背中から寄りかかる形になったためぐらつきはなくなった。しかし、体が密着していることで気持ちが落ち着かず、自然と体がこわばってしまう。
「あ、ありがと……」
礼を言うと、後方からふんと鼻を鳴らす音が聞こえた。
ルディアスはそれきり何も言わず、その場に束の間の沈黙が下りる。腰に腕を回されたままの花音にとっては少々居心地が悪く、何か話題を提供しようと口を開きかけるも、ちょうど良くキルスが馬を引き連れて戻ってきたためあえなく失敗に終わる。
（うう、この手がなければまだ恥ずかしくないのに！いや、どっち

にしろ恥ずかしいけど！……そうだよ、出発してから話しかければいいんだよ！よし、がんばれ自分！）

花音がそんな決意を固めているのを尻目に、ルディアスは片手で手綱を握り直し、馬の脇腹を軽く蹴った。応えるように、二人を乗せた馬はゆっくりと歩き出す。続いてキルスも馬を動かした。

しかし、馬はいつまでたっても速度を上げる気配を見せず、ルディアスやキルスもそれを急かす様子はない。不思議に思い、花音はルディアスに声をかけた。

「ねえ、なんでこんなにゆっくりなの？馬ってもっと早いものかと思ってたけど」

「俺は別に早くてもかまわないがな。それでお前の尻がどうなるかは知らん」

「尻？」

言っている意味がわからず花音が首を傾げていると、後方からキルスの声がとんできた。

「お前みたいな不慣れな者は、馬と動作を合わせられず体に負担がかかるんだ。速度を上げれば、臀部が鞍に強く打ち付けられる。それを防ぐためだ」

「そうだったんだ……ありがと。なんだ、優しいところもあるじゃん」

礼を言うも、ルディアスはそれを鼻で笑ってみせる。

「優しい、だと？単にウィゼスに会う前にへばってもらっても困るってだけだ」

「……ですよねー」

「不満そうだな。それとも――俺に優しくしてほしいのか？」
ルディアスはやや声を落とし、花音の耳元に口元を近づけた。
囁くような声音にぞわ、と鳥肌が立ち、花音は咄嗟に悲鳴を上げた。
「ひっ！？……キルスー！なんか身の危険感じるからそっちに乗せてー！」
「――は？」
虚をつかれたような声が聞こえたが、それを無視してなおも言い募る。
「あんたのほうがいろいろと安心できそうだから！」
「……意味がわからん」
「くくっ、おい、キルスが困惑しているぞ。諦めてこのまま乗っていろ」
困惑気味のキルスと花音のやり取りに笑みを浮かべ、ルディアスはさらに花音を抱き寄せる。
花音は恥ずかしさで顔を紅潮させ、少しでも離れようともがこうとするが、馬上でルディアスに支えられている以上、どうにもならず。
からかうルディアスとからかわれる花音。そして状況がわかっていないキルス。
この状態は、花音が疲れて反論できなくなるまで続けられたのだった。

act. 8（後書き）

馬に一緒に乗る人物、最初はキルスにしようと思ったんですが……何故かルディアスに。キルスとの絡みもこれから増えていく予定です！

act. 9

馬を走らせ続けること約半刻。三人は王都よりやや離れた位置にある森の中に足を踏み入れていた。

道は多少でこぼこしているものの、通行に支障がない程度に整備されている。どうやら一本道のようで、迷う心配もなさそうだ。

馬が足を進めるたびに起こる規則正しい揺れの中、花音はルディアスにもたれかかったままの体勢で周囲をぐるりと見渡した。

木漏れ日がそこかしこに降り注ぎ、木々の揺れる音や小鳥の鳴き声が時折聞こえてくる。花音は新鮮な空気を胸いっぱいに吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

よく考えれば、城外に出たのはこれが初めてだ。勝手に城を出てはならないというルディアスの言いつけもあるが、自分自身新しい環境に順応するだけで精一杯だったことも大きい。

花音は黒髪を隠すためにと途中で渡された薄いベールを被り直し、わずかに目を伏せた。

（城の生活には慣れたけど、外の世界のことはリューレに教えてもらった知識だけなんだよねぇ……今すぐじゃなくてもいいから出かけてみたいなー）

ぼんやりとそう考えたところで、ルディアスがおもむろに手綱を引き馬を停止させた。

到着したのかと思い視線を巡らせるも、今までと同じ景色が広がっているだけで、神殿らしき建物は見当たらない。休憩でもするつもりなのだろうか。

「おい、小娘」

声のしたほうに顔を向ければ、キルスが花音とルディアスの乗る馬の横に立っていた。キルスは花音の左足側に立ち、こちらを見上げている。キルスの乗っていた馬は、いつの間にか傍らの木に繋がれていた。

「到着だ。手を貸してやるから早く降りろ」
「え、だってまだ森の中じゃん。神殿もないし本当にここであってるの？」
「見ていればわかる。いいから黙って手を貸せ」
「はぁい」

花音はそう言うと、体を捻ってキルスのいる方向に上半身を向けた。ルディアスはそれに合わせて花音の腰に回していた腕を外す。キルスは花音の体の脇に手を差し入れると、自然な動作で抱き上げて地面に降ろした。その手つきは、言葉とは裏腹にどこか気遣うようなものだった。

花音に続いて、ルディアスが馬から飛び降りる。ルディアスは馬をキルスに任せ、すぐ近くにあった大木に歩み寄って行く。花音は慌ててルディアスに駆け寄り、大木を見上げた。

その大木は周囲の木々よりも大きく立派に見えるが、どこか神聖な雰囲気を漂わせているようにも思える。花音は少しだけ不安になり、大木に触れようとしているルディアスに声をかけた。

「ね、ねえ！その木に何か用事でもあるの？」

花音の問いに、ルディアスは薄く笑う。

「見ていろ」

それだけ言うと、ルディアスは大木に触れ何事かを呟いた。
瞬間、大木が燐光を放ち始めた。目を見開く花音の目の前で、光に覆われた大木は徐々に縮みはじめ、その姿を変えていく。光が消えた後、眼前に現れたのは大木ではなく、大理石でできた台座だった。
その台座はちょうど花音の胸のあたりまであり、表面には文字が刻まれていた。見たことのない文字列ばかりで花音には読めなかったが、ルディアス曰く、その文字は古代文字なのだそうだ。

「何がどうなっているのやら……ねえルディアス、説明してよ」
「リース神殿はクロスレイドに現存する神殿の中で最古の神殿にあたる。この神殿には他にはない貴重なものが多いからな。これは昔の人間が作った、神殿を守るための仕掛けだ」
「へえ、そうなんだ。確かにこんな仕掛け絶対に気付かないよね。驚いたよ」
「ま、手が込んでいるとは思うがな」

言いながら、ルディアスは無造作に片手を台座の上にかざした。
一拍の間をおいて、足元に大きな魔方陣が浮かび上った。紫色の光が、五芒星を中心にして複雑な紋様を描いている。

「うわっ！何これ！」

驚いて後ずさる花音の背中を、遅れてやってきたキルスが軽く押し返す。

「ただの魔方陣だ。いちいち驚くな」
「だ、だってキルス（あんた）と違って見るのも初めてなんだよ！？驚くのも無理はないでしょ！」

「お前、怖いのか？」
ルディアスの揶揄を含んだ台詞に、花音はむっとして頬を膨らませた。
「怖いわけないじゃん！失礼な！」
「くくっ、どうだかな。――さて、そろそろ跳ぶぞ」
そう宣言し、ルディアスはもう一度手を台座の上にかざした。
「え、ちょ、待って、跳ぶって――」
花音の慌てたような声は、そこで唐突に途切れた。
ざあ、と一陣の風が森の中を吹き抜けていく。しかし三人がそれを肌で感じることはなく、ひときわ目を引く大木が風にそよぐだけだった。

＊

瞬きひとつの間に、景色ががらりと変わっていた。
先程まで眼前に広がっていた風景とはまったく異なり、今視界を覆い尽くしているのは日の光を浴びて悠然と佇む白亜の神殿。長い年月が経過しているためなのだろうか、外壁などに多少の老朽化が見られる。しかし、その外観は未だ美しく保たれているようだった。
よく手入れされた芝生が周囲を取り囲み、大理石でできた通路が神殿の入り口までまっすぐ伸びている。通路の両脇には、水晶玉を模した球体が乗せられた台座が等間隔に並んでいる。
「うわあ……ここがリース神殿……？」

城よりもひとまわり小さな神殿の外観を見上げ、花音は感嘆の声を上げた。
最古の神殿とルディアスは言っていたが、遠目からでは充分綺麗だと思う。これもあの仕掛けと、神殿を守ってきた人達の努力の賜物なのだろうか。
そこまで考えたところで、花音ははっとする。一体何故、自分はここにいるのだろうか。

「ね、ねえ、さっきのって何！？」

隣に立っていたルディアスの袖を引き疑問をぶつけると、彼は花音を一瞥し淡々と答えた。

「移送陣だ」
「いそうじん？」

反芻しつつ花音が首を傾げると、ルディアスは面倒くさそうにため息をついた。

「魔方陣にはさまざまなタイプがあるが、あれは空間転移を行うためのものだ。リース神殿に入るには、あの仕掛け――つまり空間転移を行わなければならない。わかったか？」
「なるほどね。教えてくれてありがとう」
「この俺がわざわざ教えてやってるんだ、感謝するのは当たり前だろ？」
「もう、あんたは一言多い！」

相変わらずの尊大な態度に花音が突っ込むと、ルディアスは喉の奥で低く笑う。傍らでそのやりとりを口をつぐんだまま見守っていたキルスは、花音の態度になんともいえない表情を浮かべるも、ル

ディアスに名前を呼ばれ居住まいを正した。

「キルス。こいつを任せたぞ」
「は。……小娘、お前は私とだ」
「え、任せたってルディアスは？」
「俺は先にウィゼス（じじい）のところに行く。お前はしっかり支度してからこい」

ルディアスはそれだけ言うと、身を翻して神殿の中へと去っていった。
一方の花音は事情がわからず首を傾げるばかりだ。

「支度って……何も持ってきてないんですけど」
「神官長であるウィゼス様にお会いするんだ。さっさとベールを取って服装を整えろ」
「あ、そっか。服装にも気をつけないといけないんだね。神官長ってくらいだから、この神殿で一番偉い人なんだろうし。緊張するなー」

花音は身に着けていたベールを取り、持ち運びやすいように折り畳んで脇に抱えると、もう片方の手で軽く服の汚れを払った。キルスはそれを確認するないなや、一人でさっさと歩き出してしまう。花音は慌てた様子でそれを追った。

「ちょ、ちょっと！置いてかないでよ！歩幅とか全然違うんだからさ！」

そう言うと、キルスは無言で歩調を緩めた。思いのほかすんなりと言う事を聞いてくれたことに拍子抜けし、花音はやや困惑気味に礼の言葉を口にした。

（てっきり、睨まれるかと思ったんだけどな。それかいつものお小言とか。キルスに良く思われてないのは確かなんだけどな……いや、わかんないけど）

顔をつきあわせればいつも口喧嘩ばかりだったから余計にそう思う。未だに間者だと疑われているのか、それとも別の理由なのか。それでも、未だに名前で呼ばれたことがないのが現状である。

そういえば、初日に部屋へ案内してもらったときでさえ事務的な会話しかしていなかった。

（でも、ルディアスもキルスも悪い人じゃないっていう印象は変わらない。だから、いつか必ずキルスとも仲良くなりたいな）

ルディアスとは言わずもがな、と心の中で付け加え、花音はまっすぐ前を見た。

神殿内に人の気配はなく、しんとした回廊に二人の足音だけが響いている。キルスによれば、今回はすべての神官が大広間に集合している“祈り”の時間を見計らっての訪問であり、花音を人目につかせないように調整した結果なのだという。よって、ウィゼスとの対面は彼の私室で行われるということだった。

花音はキルスの後について歩きながら、ぐるりと視線を巡らせた。天井付近に設置されている窓からは太陽光が差し込み、大理石の床を照らしている。足元には埃ひとつなく、人の手が行き届いていることを窺わせた。

回廊を一通り眺めたところで、キルスが足を止めたためそこで花音も立ち止まる。

眼前には精緻な紋様が描かれた大きな扉がある。扉には羽の生えた女性のレリーフが飾られており、花音はしばしそれに目を奪われた。しかし、キルスの入室の旨を告げる淡々とした声が花音を現実

に引き戻す。

（やば、ぼーっとしてた！偉い人に会うんだもの、しっかりしなくちゃ）

背筋を伸ばす花音の前で、ゆっくりと扉が開かれる。

室内に足を踏み入れた花音の視界に入ってきたのは、腕組みをしてこちらを見やるルディアスと――

「お会いしとうございました――月女神の巫女様」

ローブを身に纏った白髪の老人が、花音に向かって深々と低頭する姿だった。

act. 10

（えーっと……これは、どうしたものか）

予想もしていなかった展開に、花音は何も言えないまま視線を彷徨わせることしかできなかった。

緊張などどこかへ行ってしまった。それよりも、一体何故リース神殿最高位の神官が自分に頭を下げているのだろうか。自分はあくまで月女神の巫女候補であって、確定ではないのだ。それなのに何故彼は自分を巫女と呼んだのだろうか。疑問は次々に浮かんでくる。

しかし、今最優先にすべきは疑問をぶつけることではない。

「――あ、あの、頭を上げてください！」

戸惑いがちに声をかけると、老人――ウィゼスはゆっくりと顔を上げた。

色で表すとすれば、ウィゼスの印象はまさしく“白”。ところどころに金色の紋様が描かれた白地のローブに、背中まで流れた白髪。顔のあちこちに刻まれた皺が生きてきた年月を物語っており、口元は白い髭に覆われている。森を思わせる深い緑色の瞳は、花音の姿をしっかりととらえていた。

花音はその目を見つめ返し、困ったように微笑んだ。

「私はそんな風に頭を下げられるような人間じゃありません。そもそも私は異世界の人間ですし、髪と目が黒いだけで特別な力もないんです。だからどうか普通に接してください」

「ウィゼス、こいつはあくまで“候補”だ。第一、畏まるような相手でもない」

ルディアスが花音の言葉に付け加えるように言うと、ウィゼスはふうと息を吐いた。

「陛下と巫女様――候補様がそう仰られるのならば。――して、候補様。あなたのお名前をお聞かせくださいますかな？」

「花音です。私はこの世界から見れば異世界の人間なんですけど、月女神の巫女候補ということでお城に滞在させてもらってます」

「ほっほ。花音、か――良い名前じゃの」

先程の堅苦しい口調とは打って変わって好々爺然とした様子のウィゼスに、花音はほっと息をつく。

自分より確実に長い年月を生きている人物に恭しくされるなど、居心地が悪いだけだ。

花音の表情が幾分か和らいだことに気づいたのか、ウィゼスは目を細めながら口を開いた。

「ところで、おぬしはわしのことを知っておるのかの？」

「あ、はい、少しだけ。この神殿の神官長を勤めているってことと、私にこのペンダントをくれた方ってことだけですけど」

そう言うと、花音は首にかけていた月のペンダントを取り出した。

ウィゼスは月のペンダントを一瞥し、軽く頷いてからルディアスに視線を移す。

「ほっほ。早速女子（おなご）に贈り物をされるとは、陛下もなかなか隅に置けませんな？」

「“賢者”もついに耄碌したようだな。魔粒子（あんなもの）を手元に置いておく

ほうが危険だろうが。そして本来、あれはお前が手渡すべきものだろう？」
「本来ならばそうですのう。しかし、まずは陛下に見極めてもらわねばなるまいと考えた結果ですのでご容赦くだされ。して、いかがでしたかの？」
「ふん……一応は“合格”といったところだろう」

言いながら、ルディアスは話の内容がわからず不思議そうな顔をしていた花音をちらりと見やる。つられるように、ウィゼスの視線も自然とそちらを向いた。
意味深な会話の後の、二重の視線。
花音はとりあえずぎこちない笑みを返したが、内心居心地の悪さでいっぱいだった。

（やめて二人して無言でこっち見ないでー！私内容さっぱりなんだから！）

「俺とじじいが何を話しているか、気になるか？」

心を見透かすかのようなルディアスの台詞に、花音はどきりとする。

「そ、そりゃあ気になるわよ！賢者とか合格とか、何言ってるのか全然わかんないし。ねえ、キルス？」
「……陛下、申し訳ありません。恐れながら、私も“合格”の意味を図りかねております。一体どういうことなのでしょうか？」

花音が後方に立っていたキルスに同意を求めると、キルスは会釈した後やや硬い表情でルディアスとウィゼスの言葉を待った。
ルディアスは花音とキルスを交互に見比べると、ウィゼスに目配

せをする。
　ウィゼスは了承したかのように一度だけ頷くと、咳払いをしてから話し始めた。
「のう花音、先程おぬしは月女神の巫女“候補”として城に滞在していると言ったじゃろう？」
「え、あ、はい。そうですけど」
「その“候補”という立場は、一体誰が決めた？」
「誰が……」
　花音は、この世界に来たときのことを思い出す。
　気づいたら目の前にルディアスとキルスが立っていて、月女神の巫女と言われたけれど、自分には見に覚えのないことで。
　伝承に基づいた外見をしているからと、月女神の巫女“候補”として城に入れられた。
　すべては、ルディアスが決めたこと。
「……決めたのは、ルディアスです。キルスは軽率だって反対していましたけど」
「ほっほ、そうじゃな。よからぬことを企む者がいないとは言い切れぬ。染料で髪を染め、魔法で姿を変え、巫女だと名乗り出て来た輩も確かに存在するからの」
「欲に塗れた紛い物なんてすぐにわかる。それを見破れないほど俺達は愚かではない」
「……ちょっと待ってルディアス、話がわかんなくなってきた」
　会話に割り込んできたルディアスにストップをかけ、花音は額に手をやり思案する。
（欲に塗れた紛い物……偽者ってことだよね。偽者が巫女に成り済

まそうとしたこともあったけど、ルディアス達は騙されなかった。だけど、突然現れた私が候補として城に住むことを許したのはルディアスで……あれ、なんかおかしくない？）

浮かび上がる疑問点。しかし、花音がその疑問の正体を考える前に、キルスが動いた。

「お、お待ちください陛下！もしや陛下は、最初からこの娘を――！」

キルスの慌てたような叫びに、ルディアスはゆっくりと首を振る。

「違う。候補はあくまでも候補であって、確定ではない。お前もあの場にいただろう？」

ここで言葉を切り、ルディアスは所在なさげに立ち尽くす花音を見据える。

「わからないからこそ、留めた。しかし、俺はこの数日で“可能性は高い”と判断した。だからウィゼスに引き会わせた」

「え、え、ちょっと待って？可能性が高いって、それどういう意味？」

「言葉通りの意味だが？お前が“月女神の巫女”である可能性が高いということだ。ウィゼスも同意見だからこそ、月のペンダントを渡したのだろう」

ルディアスの言葉を受け戸惑いがちに視線を彷徨わせる花音に、ウィゼスは静かに頷いてみせる。

そのままキルスに視線をずらせば、彼もまた発する言葉を探しているようで、口元を手で覆ったまま何も話さない。

（ど、どうしよう……なんか空気が重いよ！いや、私もびっくりしてるけどさ！）

そんな風に花音が考えあぐねていると、空気を察したウィゼスがふうと息を吐き、静かに時を刻む壁掛け時計を見ながら穏やかな声音で話し始めた。

「……そろそろ“祈り”の時間も仕舞いじゃ。もうすぐ神官達が大広間から戻ってきてしまう。しかしまだ花音に何も話せておらんからのう……」

「到着が予定より遅れたからな。これから神殿の客室を用意させてもいいが、残るのはキルスと花音だけだ。俺は城に戻らねばならん」

「ふうむ、しかし陛下にも話を聞いていただかねばなりませんからの」

ウィゼスは思案するように自身の髭を数回撫で付けた後、おもむろに右掌を下に向け、ゆっくりと横に動かした。

手の動きに応じて、足元に大きな魔方陣が浮かび上がってくる。それは森で見たものとよく似ているが、目を凝らせば紋様がところどころ異なっていることに気づく。

しかし、花音がそのわずかな変化に気づくことはなく、ただ驚愕の声を漏らすだけだった。

「うひゃっ！え、これって魔方陣！？」

「簡易的ではあるが、わしの部屋と城とを繋ぐゲートを作っておいた。三日は空間がもつじゃろう。明日の同時刻、お三方揃ってわしの部屋に来ることはできますかの？」

「ふん、面倒だがそうするしかあるまい？」

話が進まないからな、とルディアスが腕組みをしながら答える。
ウィゼスはルディアスの返答に頷くと、今度は花音に向き直った。
「花音、おぬしが月女神の巫女かそうでないかはわしにもまだわからん。明日詳しい話をするが、その前に月のペンダントの意味だけは教えておこう。それはの、わしがおぬしの存在を認めた証。月女神の巫女候補であると、リース神殿が認めた証なのじゃ」
「そ、そんなものを私にくださったんですか！？可能性が高いってだけで、巫女でもなんでもないのに……！」
月のペンダントにそんな意味がこめられていたなんて。
困惑する花音に、ウィゼスはにっこりと微笑んだ。
「おぬしは異世界の人間じゃ。今は陛下が守ってくださっているが、この世界では後ろ盾も何もないに等しい。身分証明として受け取っておいておくれ」
返品されてはわしも悲しいしのう、とおどけてみせるウィゼスに、花音はなおも言い募ろうとするのを止め、笑みを向ける。
自分のためを思ってくれたものなのだから。
これ以上は無粋というものである。
「ありがとうございます――ウィゼス様」
感謝の言葉を口にする花音に、ウィゼスはまたにっこりと微笑んだ。

ａｃｔ．１０（後書き）

遅くなってしまいました…今回は甘さの欠片もないので、次はちょっと甘めにしようと思います。甘い話が書きたいんだ！

act. 11

ウィゼスが用意した魔方陣は、城内のルディアスの部屋に繋がっていた。
城に戻った途端、ルディアスは会議に、キルスは公務にとそれぞれの仕事に戻っていってしまう。
特に何もすることがなく、手持ち無沙汰となった花音はとりあえず自室に戻ることにした。

「まあ、花音様！おかえりなさいませ！」

自室に戻ると、雑巾片手に満面の笑みを浮かべるアリアが花音を出迎えた。

「ただいまー！あれ、もしかして掃除中だった？」

花音が雑巾を指差しながら首を傾げると、アリアは恥ずかしそうに笑う。

「ええ、でももう片付けてお茶の支度をするところでしたの。お疲れでしょう？今お茶の用意を致しますので少々お待ちくださいませ」
「ありがとうアリア」

てきぱきと掃除用具を片付けはじめるアリアの姿を眺めながら、花音はソファーに座りほっと息をつく。

「ふー……」

緊張が解けたのか、座った瞬間どっと疲れが出てきた気がする。

月女神の巫女である可能性が高いと言われたものの、何か特別なことをした覚えもなく、自分に変化があったわけでもない。いたって普通に過ごしてきただけである。

何故、ルディアスとウィゼスは可能性が高いと判断したのだろうか。

（後でルディアスに聞いてみようかな）

ルディアスは夜まで公務があると言っていたが、就寝前ならば彼も時間が空くだろう。

頃合を見て、またアリアに連れて行ってもらおう。

そう心に決めつつ、花音はアリアが掃除用具を持って退室していくのを見送りながら、ソファーの背に体を預けた。

＊

「――こんな夜更けに何の用だ」

花音がルディアスの部屋の扉を叩いたのは、外の世界が闇色一色に染まりきった頃。

夜着に上着を羽織る格好で部屋を訪れた花音を、同じように夜着に身を包んだルディアスが呆れた表情で出迎えた。

「そんな薄着で男の部屋を訪れるなんてな。誘っているのか？」

「誘ってなんかないわよ！ちょっと聞きたいことがあってアリアに連れてきてもらったの。入れてくれる？」

「ふん、いいだろう」

ルディアスは素っ気無く言い、身を翻して室内に戻っていく。
花音は送ってくれたアリアに礼を言うと、ルディアスの後を追った。

「それで、何が聞きたいんだ？」

花音が扉を閉めた瞬間、ベッドに腰掛けながら足を組むルディアスが声をかけてくる。
花音はルディアスの傍まで進むと、言いにくそうに口を開いた。

「ほら、ウィゼス様のところで言ってたでしょ？私が月女神の巫女である可能性が高いって」
「ああ、それがどうした？」
「どうしてそう思ったの？」

まったく心当たりがないんだけど、とルディアスの顔を覗き込むと、彼は花音を見上げつつ足を組み替えた。

「教えて欲しいか？」
「教えて欲しいからここに来たんじゃない。もったいぶらずに教えてよ」

両手を腰に当てながらそう言うと、ルディアスは唇を弧の形にした。

「くくっ、いいだろう」
「――わっ！」

ぐい、とルディアスに腕を引かれ、バランスを崩した花音は勢い

良くベッドに倒れてしまう。
ベッドに全身を預ける形になり、花音は慌てて上半身を起こした。
「何するのよ！びっくりするでしょ！」
「見上げてばかりでは首が疲れる。無理やり押さえつけられたくなかったらそこで聞いてろ」
無理やり押さえつける、という言葉の響きから危険なものを感じて、花音は反論の台詞を封じ込め、おとなしくルディアスの隣に座り直した。態度が一変し黙り込んだ花音の姿を見、ルディアスはおかしそうに笑う。
ルディアスは笑った姿も絵になるのだが、それを素直に口にするのは気が引ける。
（かっこいい、なんて言ったら絶対からかわれるし。美形なのに性格は俺様っぽいからなー）
思えば、元の世界で男性と関わることなんてほとんどなかった気がする。
高校生にもなれば、花音の周囲でも早々に彼氏や彼女をつくり青春を謳歌する者が多くなった。しかし、花音は今まで「好きな人」というものができたためしがない。
いつか好きな人ができればいいな、と思いながら、周囲の話をドキドキしながら聞いているだけでよかった。それでも充分楽しかったのだ。
元の世界に帰れない以上、普通の高校生としての生活は望めないけれど。
――もう、家族や友人には会えないかもしれないけれど。
（……お父さん、お母さん）

ぽつりと、心の中で呟く。
蓋をして、見ないふりをしていた感情が思い起こされそうになる。
何気ない日常が、ひどく懐かしく思えた。

「……どうした？」

さらりと横から髪をかきあげられ、花音は今まで物思いに耽っていたことに気づく。
俯いたまま動かない花音を怪訝に思ったのだろう。花音はふるふると首を振った。

「なんでもないよ。ちょっと考え事してただけ」
「泣きそうな顔をしているな」
「！」

くいと片手で顔を動かされ、ルディアスと目が合った。
まっすぐに見つめる青い瞳の前では、心の奥に巣くう寂しさも見透かされてしまいそうで。
花音は郷愁の思いを押し込め、ぎこちなく笑った。

「本当になんでもないって。ちょっとだけ元の世界のことを思い出しただけだからさ。ほら、そんなことより早く教えてよ」
「……馬鹿が」

ルディアスはため息をつくと、自然な動作で花音の体を引き寄せ、そのまま抱き締めた。
突然の抱擁に、花音は目を見開いたまま身を硬くさせるも、背中に回された腕は離れない。

「まったく……この俺にこんなことをさせるのはお前くらいだぞ？」
言葉とは裏腹に、髪を梳く手つきは優しいもので。
手慣れているのかな、と花音は頭の隅でぼんやりと思う。
「泣きたいなら泣け。特別に今だけ胸を貸してやる」
泣くつもりなんてない。
そう言えなかったのは、視界が徐々に滲んできているから。
「……優しいルディアスなんて初めてかも。明日は雨だね」
「阿呆が。いつも言っているだろう？お前を気に入っていると。俺以外の男の前で泣かれても困るんでな」
「ふふ、何それ」
花音が震える声で笑ってみせると、ルディアスは囁くような声音で続けた。
「――無理をするな。泣きそうな顔のお前を見ていると調子が狂う」
声を落とし、呟くように囁かれたそれが花音の耳に入った瞬間、心の扉が決壊した。
大切な人に会えないのが寂しい。苦しい。会いたい。帰りたい。
さまざまな感情が涙となって溢れ、頬を伝う。
感情の波に耐え切れず、自分を包み込む存在にしがみつけば、自然と抱き締める力も強くなった。
それがまた涙を誘い、花音は時間を忘れて泣き続けた。
＊

「……ごめん」

響いていた嗚咽が止み、室内に満ちた静寂を打ち破ったのは搾り出すような花音の声。

涙と共に気持ちが落ち着くと、次は思い切り泣いてしまったことへの羞恥心が襲ってくる。

人前で泣いてしまった。

しかも、異性であるルディアスに抱き締められながら。

（顔、上げられない……っ！）

気恥ずかしさから顔を上げられずにいる花音の耳元で、ルディアスが笑う気配がした。

「随分としおらしいな。こうして身を委ねてくるお前も嫌いではないが」

「……！」

からかわれているように感じた花音は、さっと頬を紅潮させルディアスから距離をとろうと身をよじる。しかし、ルディアスの腕が離れることを許さない。

早々にこの体勢を何とかしたい花音としてはそれが不満で仕方なく、力をこめてルディアスの胸板を押し返そうとしたが、体と体の間にスペースを作るだけにとどまった。

花音はルディアスを見上げ、文句のひとつでも言ってやろうかと口を開きかけるも、次のルディアスの言葉で閉口する。

「居場所が必要なら、俺が作ってやる」

花音は瞠目し、息を呑んだ。

ルディアスはそんな花音の様子にかまわず、不遜な笑みを浮かべる。

「お前一人くらいどうとでもなる。幸い、お前は異世界からの来訪者という稀有な存在であり、知る者も少ない。ならば、多少の情報操作くらい容易いことだ」

「情報操作って……なんでそこまでしてくれるの？だって、もし巫女じゃなければ私はこの世界にいる意味を失うんだよ？キルスの言う通り、ただの小娘になる。放り出したっていいじゃない」

「ならばお前は城から放り出されたいのか？当てもなく、後ろ盾もなく、知らない世界を彷徨いたいと？」

それは、と言いかけて、花音は言葉に詰まる。

追い出されたいわけじゃない。むしろ、ルディアスの提案は素直に嬉しく甘えてしまいたいくらいだ。

だからこそ、不思議なのだ。どうしてルディアスがここまで自分のために心を砕いてくれるのか。

（……もう、日本のこと考えたせいだ。気持ちが弱ってるみたい）

花音は目を伏せ、小さく息を吐く。

ルディアスはふっと笑い、花音の髪に手を滑らせる。

「――理由を、聞きたいと言っていたな。俺とウィゼスが何故お前を本物だと考えるのか」

「……？」

唐突な話題の変化についていけず、花音は内心疑問符を浮かべる。

しかし、それは花音自身も気になっていたことなので、何も言わずにルディアスの言葉を待った。

「理由はみっつだ。ひとつめは、お前が異世界人であるということだ。我々は異世界を渡る術（すべ）を持たない。どんな魔法を持ってしても、実現は不可能だろうな」
「そうなんだ……だからあのとき、ルディアスは帰り方がわからないって言ったのね」

初めて会ったときのことを思い出しながら呟く花音に、ルディアスは頷いてみせる。

「ふたつめはウィゼスの前でも言ったことだから説明はいらんな。みっつめは……そうだな、俺の勘だ」
「か、勘！？」

花音は素っ頓狂な声を上げると、ルディアスの顔を怪訝そうに見つめた。

（月女神の巫女って、伝承通りなら国家に影響を及ぼす存在よね？いや、なんの力も無い私が影響を及ぼすなんてことないんだけど！でもさ、仮にも国王がそんな勘なんて不確かなものを判断の材料にするなんて……）

そんな花音の心の内を察したのか、ルディアスは喉の奥で低く笑う。

「くくくっ、らしくないとでも言いたげだな？」
「だ、だって」
「だが、それが俺の出した結論だ。ま、まだ断定できる証拠はないがな。……それにな、俺は言ったはずだぞ？」

さらり、とルディアスの指が花音の髪を梳く。
不快だとは微塵にも思わなかった。
繰り返される動作は花音の心を落ち着かせてくれるようで、それを裏付けるかのようにゆるゆると眠気が襲ってくる。こんな状況で眠ってはいけないと、花音は重い目蓋をこじ開けようとするが、その行為もそう長くは続かなかった。睡魔には抗えない。
それを知ってか知らずか、ルディアスは手の動きを止めないまま言葉を続ける。

「お前を手懐ける、と。お前をこのまま手放すにはあまりにも惜しい。俺にそう思わせたからには――容赦はしない。覚悟しろよ？」

突き動かすのは一体どんな感情か。珍しい生き物を拾ったがゆえに生じた独占欲や征服欲とでもいうのだろうか。それとも別の何かなのだろうか――それはルディアス本人にもわからない。
そして、ルディアスに身を預けたままの花音は既に深い眠りの世界へと旅立っており、彼の口から滑り落ちた台詞など知る由も無かった。

ａｃｔ．１１（後書き）

はい、ラブが書きたくてこうなりました。私は甘いのが大好きです

（聞いてない）

一応逆ハーの予定なんですが、どうやら先は長そうです……キルスとリューレにもそろそろ出てきてもらわないと！

act. 12

夢を、見ていた。
どこまでも白く、上も下もないような果てのない空間。
そのだだっ広い空間の中、彼女は立っていた。雪のように白い肌に、吸い寄せられるような赤い唇。腰まで真っ直ぐに流れる漆黒の髪が、シンプルな白いドレスと相まってとても神秘的な雰囲気を醸し出している。眠るように伏せられた瞳を縁取る長い睫毛は涙で濡れていた。
取り残されたように悄然と立ち尽くすその姿に、花音は寂しさを覚えた。
この場に花音が存在しているのか、していないのかはわからない。あるのは、映像を見ているような不思議な感覚。
ふと、彼女が目を開ける。髪と同色の瞳は、どこか悲しげな光を帯びていた。

「ごめんなさい――」

鈴の音のような声が、謝罪の言葉を紡ぐ。

「わたくしのせいで、争いが起きてしまう」

独り言か、それとも誰かに宛てた台詞なのか――それは定かではない。

「愛する世界を、愛する者達を、止められない。わたくしの力では、

あの子を助けられない」

悲しげに、哀しげに、彼女は微笑む。自分を抱きしめるように、両腕を抱え込みながら。

「あの子がわたくしを必要としない限り――わたくしはあの子を助けてあげられない。それでもわたくしは、あの子に祝福を与えるの。世界のために。あの子のために」

苦しげな表情を浮かべ、彼女はもう一度目を伏せた。その瞬間、一筋の涙が彼女の頬を伝う。

（どうして泣いているの？どうしてそんなに苦しそうなの？――ねえ、泣かないで）

花音は、彼女に声をかけたかった。

けれども、言葉を発することはできず、花音の思いは彼女に届かない。

触れることも、声をかけることもできない状況の中、花音は願う。

せめて彼女の憂いが晴れますように、と。

＊

翌朝、花音は誰かに呼ばれたような気がして目を覚ました。

眠りと覚醒の狭間をぼんやりと漂いながら、花音は“夢”について考え始める。

あの女性の姿が記憶に焼きついて離れない。所詮夢は夢でしかないのだが、どうしてか気にせずにはいられなかった。それが、いずれ薄れゆくものだったとしても。

あれは、一体何だったのだろうか。

（夢を鮮明に覚えてることなんてなかなか無いよねえ？……でもま、気にしても仕方ないか。まだ眠いし、もう少し寝よっと。寝坊してもアリアが起こしてくれるだろうしね）

欠伸をひとつ零し、布団を肩まで掛け直す。

そうして布団に潜り込みながら瞼を閉じるが、妙な違和感が花音の脳裏をかすめた。

違う。何かが違う。

先程視界に入った天井も、体を包み込む柔らかいベッドも、見覚えはあるけれど、何かが違うのだ。

そこまで考えて、花音はふとある事実に思い当たる。

ルディアスの部屋を訪れた後、自室に戻った記憶がないのだ。

（――まさか！）

花音は慌てて起き上がると、きょろきょろと周囲を見渡した。

どう見ても、花音の部屋ではない。それどころか、幾度か訪れたある人物の部屋と酷似しているような気がする。

花音の背中をひやりとしたものが伝った。

（……ってことは）

恐る恐る、自分の隣に視線をずらしていく。

そこには、こちらに背を向けて眠るルディアスの姿があった。

「――――っっ！！！」

思わず大声で叫んでしまいそうになったが、即座に片手で口を覆い隠すことで事なきを得る。

（う……うわあああやらかした！やらかしたよ自分！）

これでは以前と同じ状況ではないかと、花音は頭を抱えたくなった。

違和感の正体はこれだったのだと、花音は昨夜のことを思い出しながら大きくため息をつく。

（あ、あんな格好で泣き疲れて寝ちゃうなんて馬鹿じゃないの自分！そしてルディアスも叩き起こしてくれればよかったのに！そしたらこんな風にそっ……添い寝みたいなこと！）

花音はほんのり赤くなった頬を隠すように、勢い良く枕に顔をうずめた。

その拍子にベッドが少しだけ揺れたが、ルディアスは熟睡しているのか身じろぎすらしなかった。

ルディアスを起こしてしまわなかったことに安堵しつつ、花音はゆっくりと顔を上げる。

現状について、寝ている人物をわざわざ起こしてまで説明してもらおうとは思わない。むしろ、話が終わってからすぐに退室しなかった花音自身に責任があると思っている。だが、このやり場の無い複雑な思いはどこへぶつければいいのだろう。

しかし、ルディアスが弱さを見せた花音を受け入れ、慰めてくれたのも事実である。

花音は上半身を起こし、迷いながらもルディアスの背中に優しく触れた。

「――ありがとう」

それだけを言い、花音は極力物音を立てないようにしながら部屋

を出て行った。
寝ているはずのルディアスの唇が、人知れず弧の形を描いたことも知らずに。

＊

ルディアスの部屋を後にした花音は、自室までの道のりを人目につかないよう細心の注意を払いながら進んでいた。夜着のまま出歩くことはなるべく避けるようにと、アリアに言い含められていたからだ。花音にとってはパジャマ同然のそれでも、妙齢の女性が夜着のまま城内を歩き回るのはやはり好ましくないのだろう。
幸い、ルディアスと花音の部屋は同じ階ということもあってか比較的近い位置にある。
さっさと戻って二度寝でもしようと、花音は歩くスピードを速めた。

「うわっ！」
「ぶっ！」

廊下の角を曲がった瞬間、不運にも反対側からやってきた人物にぶつかってしまう。
花音は顔を押さえ、急いでその人物から距離をとった。

「す、すみませ――」
「いや……って、お前！こんなところで何をしているんだ！」

驚愕と呆れを含んだような声が頭上から聞こえ、花音は弾かれたように顔を上げる。
どうやら、花音が衝突した相手はキルスだったようだ。

（……あちゃー）

まずい相手に見つかってしまったようだ。

今後の予想としては、もはや聞き慣れたと言っても過言ではない長い説教が花音を待っているような気がする。朝から面倒なことになりそうだと、花音は内心ため息をつきながらキルスの顔色を窺った。

キルスは眉をひそめながら何か言いたげに口を開閉させている。顔はやや赤く、若干目が泳いでいるようだ。花音は普段と違うキルスの様子に首を傾げたが、ルディアスの部屋に不本意ながらも泊まってしまったことがばれて怒っているのだろうと勝手に解釈し、とりあえず謝罪してみることにした。

「あの、キルス？」

「お前というやつは……なんという格好で出歩いているのだ！」

「……はい？」

花音がおずおずと話を切り出すのと同時に、キルスが赤い顔で叫んだ。

何を言われているのかわからずぽかんとする花音の前で、キルスは無言で上着を脱ぎ始める。

突然のことに驚愕し目を見開いたまま固まっていると、キルスは花音を見ないようにしながら無造作に上着を差し出した。

「……もしかして、貸してくれるの？」

「お、お前も一応女だろう！？そんな薄着で出歩くんじゃない！」

「一応ってとこが引っかかるけどこの際スルーするわ。ていうか、この前ルディアスの部屋に行ったときと同じ格好なんだけど、これってそんなにダメなの？」

「だ、駄目に決まっているだろう！それに、あれは夜中で誰も見る

者がいなかったからだろうが！……もういいから、さっさとこれを着ろ」

今度は、有無を言わさず押し付けられた。
花音は上着とキルスを何度か見比べてから、くすりと笑う。
不器用な優しさが素直に嬉しかった。

「な、何がおかしい」
「ふふふ、なーんにも？私あんたに嫌われてると思ってたから嬉しくて。ありがとね」

そう言って笑うと、キルスは不機嫌そうな表情で花音の横をすり抜けていく。
そのまま何歩か進んだところで、キルスはぴたりと足を止める。

「――陛下は」
「え？」
「陛下は、信ずるに値するかを自分で決めろとおっしゃった。正直、今の段階ではお前が巫女なのか判断できん。だが、お前は陛下に仇名す者では無いと……思い始めている。別に、嫌いでは、ない」
「えっ……キルス、それって」

思いがけない台詞に、花音は息を呑んだ。
言葉を額面通りに受け止めるとすれば、少なくともキルスは花音を嫌っていないことになる。
咄嗟に振り向くと、キルスは花音に背を向けたまま足早にその場を去ろうとしていた。
花音はだんだんと湧き上がってくる嬉しさを隠せないまま、キルスの背に声をかけた。

「――ねえっ！今度は、私の名前も呼んでよね！」

返答はない。

だが、花音はそれでも満足だった。

（あんなに喧嘩まがいの会話してたのに、嫌われてなかったなんて！嬉しいな！これを機にちょっとずつ仲良くなれればいいんだけど）

そう思いながら、花音はキルスに手渡された上着を羽織り、自室に向かって駆け出した。

足取りは先程よりも軽かった。

部屋に帰り着いた後、花音は気分良くベッドに滑り込み、目を閉じる。

夢は、見なかった。

act. 12（後書き）

どうしてもキルスとのシーンを書きたかったので最後に入れました。
和解……なのかなあ？

act. 13

昨日と同時刻、ルディアスの部屋に集まった三人は、魔方陣の力によってリース神殿へと転移した。
正確な訪問の時刻は伝えていなかったものの、ウィゼスは突然部屋に現れた三人に驚くこともなく、「お待ちしておりました」とにっこり笑うだけだった。

「うーん、魔法ってやっぱりすごいな」

さっさと魔方陣の上から移動するルディアスとキルスを尻目に、花音はその場にしゃがみこんで魔方陣をしげしげと眺め始める。
瞬きひとつの間に世界が変わることについて、彼らは何ら疑問を持つことはない。魔法が当たり前に存在する世界なのだから当然なのかもしれない。けれど、花音にとってはそうでなく、魔方陣による転移など何度体験しても慣れそうもなかった。
紫色の燐光を放ち続ける魔方陣を眺めているうちに、花音の脳裏にふとある考えが浮かんだ。
もしも、魔法が誰にでも使えるものだとしたら。花音にも少しは可能性があるのではないか、と。

（……ま、ありえないよね。ファンタジーな世界に来ちゃったとしても、私自身は日本人なわけだし）

使ってみたい気持ちはあるけれど、と花音は自分の考えを打ち消すかのように頭を振った。

そのうち、キルスの急かすような声が後方から飛んでくる。花音はゆっくりと立ち上がり、魔方陣から降りた。

「陛下とウィゼス様の御前だぞ。少しは慎め」

「ごめんなさい、つい」

「ほっほ、良いのじゃよ。魔方陣が珍しいのじゃろう」

キルスの軽い叱責に花音が謝罪すると、ウィゼスは優しげに目を細め、その場にいる全員に椅子をすすめた。ソファーと背もたれのある木製の椅子がいくつかあったが、ルディアスは迷うことなくソファーに腰を下ろす。キルスはというと、護衛の立場を考えてか立ったまま話を聞くことにしたようだ。ウィゼスも微笑を浮かべているだけで座る気配はない。

花音は逡巡したが、一人だけ離れて座るのもどうかと思い、ルディアスの隣に浅く腰掛けた。

「それで、話というのは？」

ルディアスが早速話を切り出すと、ウィゼスはひとつ咳払いをし、居住まいを正した。

「では、昨日の続きと参りましょうかの。昨日、わしは月女神の巫女の可能性とペンダントの意味を伝えただけじゃった。しかし、それだけでは花音をいたずらに惑わせてしまうだけじゃ。だから今日は月女神の巫女について話したかったのだが……如何せん巫女についての記述が少なくての」

「え、それじゃ月女神の巫女についてはよくわからないってことですか？」

「そうは言っておらぬよ。月女神の巫女伝承はこの国に古くから伝わっておる。御伽噺のように語り継がれ、文献にも残されている。

おぬしは、伝承について何か知っておるかの？」

ウィゼスの問いに、花音は頷いた。

「はい、少しだけなら。ルディアスに御伽噺の本を一冊借りて読みました」

花音は、ついこの間まで読んでいた本の内容を記憶から手繰り寄せながら、答え合わせをするかのようにウィゼスに概要を語り始めた。

＊

月女神ロクティアは慈愛に溢れ、この世界とそこに住まう者達すべてを慈しんでいた。

ある日、月女神ロクティアは好奇心に負け、人間の姿を借りて最もお気に入りの地であったクロスレイドへ降り立った。

そこで彼女は人間の男と恋に落ちる。しかし、所詮は神と人間。仮初の姿で愛し合っていても、いずれは神の座に戻らなければならない。悲しい恋だった。

月女神ロクティアは男にすべてを話し、そのまま去ろうとした。

だが、男はすべてを知って尚彼女を愛していたため、彼女を引き止め共に生きたいと願った。

月女神ロクティアは、願いを叶えられない代わりに、神の力を使った。

この世界を愛し、男を愛した証として、ひとつの命を生み出した。

月女神ロクティアの愛と祝福を一身に受けた命は、いつかどこかで生まれ落ち、巡り巡ってこの世界に還る。この世界に戻った命は、月女神ロクティアの加護を持ち、世界を幸福に導く存在となることを告げ、月女神ロクティアはこの世界を去った。

男はひどく悲しんだが、月女神ロクティアの言葉を忘れないよう、書物に残し、人から人へと語り継いで、世界に伝承を広めた。
彼女が世界を愛したことを知らしめるために。そして、いつかやってくる大切な命のために。

＊

「――その月女神ロクティアの加護を受けた存在が、月女神の巫女だと」

花音の話が一通り終わると、ウィゼスは髭を撫でながら瞼を閉じた。

「“光に導かれし異界の乙女、国に栄光と繁栄をもたらす。彼の者、漆黒の髪と瞳を持ち、異界の服を身に纏う。すなわち、月女神に愛されし巫女なり”」

伝承の一説をすらすらと読み上げ、ウィゼスは話を続ける。

「これは、誰もが知っている伝承じゃ。時代が幾度巡っても、この一説だけは変わらずにある。月女神の巫女は伝承でしかないと考える者も多いが、わしはそうは思わん」
「何故ですか？」
「――クロスレイドに残る最古の神殿。その最高位にある者のみが知ることを許される、秘匿とされている情報。それをお教えするために、ここに集まってもらったのじゃ」

その言葉に、部屋中がしんと静まり返る。
花音やキルスは息を呑んでいたし、ルディアスは表情にすら出さなかったが内心驚いている様子だった。

「ほう、俺でさえ知らない情報とは興味深い。どういうことだ？」
「本来ならば陛下にも報告すべきことですな。申し訳ありませぬ。ですが秘匿とされているのには理由がありますゆえ」
「理由、とは？」

国王たるルディアスさえも知らない情報とは如何なるものなのだろうか。
花音もキルスも無言でウィゼスの言葉を待った。

「これまで月女神の巫女が現れなかったためと、諍いが起こるのを善しとしなかったためでしょうな。月女神の巫女伝承に深く関わりがある内容ですからの。悪用する者がないとは言い切れませぬ。……ときに陛下、この神殿のすぐ傍に祠があるのはご存知でしたかの？」

ウィゼスの言葉を受け、ルディアスは思案するように顎に手を当てた。
ややあって、ルディアスはウィゼスを見据えたまま肩をすくめる。

「俺がここを訪れるのは初めてではないが、祠の所在など知らんな。キルス、そうだろう？」
「はい、私も初耳です。それらしきものも私は見たことがありません」

確認の意味をこめてルディアスがキルスに視線を向けると、キルスは首を横に振り、花音に顔を向けた。昨日リース神殿を訪れたばかりの花音がわかるはずもなく、慌てて同じように首を振る。
ウィゼスは、当然だと言わんばかりに笑い、人差し指を立てた。
なんでも、その祠は結界によって守られているため誰の目にも映

らないようになっているのだという。
一度でも目にして祠の存在を認識してしまえば、その後結界があっても見えるようになるのだそうだ。結界の担い手はリース神殿の神官長であり、神官長の任につく者は口伝えに祠の存在を知り、その役目を継いでいく。そうして、秘密は守られる。

「そんなに大事な秘密を、私達に教えてしまってもよかったのですか？」

花音がおずおずと口を開くと、ウィゼスは「なに、かまわんよ」と目を細める。

「月女神の巫女候補が現れたのじゃ。教えんわけにはいかぬじゃろう？祠は、巫女のために存在するのじゃから」

ウィゼスの話を要約するとこうだ。
祠は洞窟状になっており、その最奥には月女神ロクティアが巫女のために残した遺物が保管されているのだという。しかし、最奥に続く扉は不思議な力によってかたく閉ざされており、誰もその先に足を踏み入れることができない。ウィゼスの力をもってしても、その扉を開けることはできなかったそうだ。

「わしは考えた。きっとあの祠は、巫女の来訪を待ち望んでいるのだと。扉を開く鍵は、巫女なのだと」
「――くくっ、なるほど」

突然、ルディアスが肩を揺らして立ち上がる。
何がおかしいのかわからず花音が訝しげな目を向けると、ルディアスは意地悪そうな笑みを浮かべ花音の頭にぽんと手を置く。

「ちょっ……」
「お前の言いたいことがわかったぞウィゼス――お前、こいつに扉を開けさせるつもりだな？」
「――へ？」

ルディアスの手を振り解こうと躍起になっていた花音は、その言葉に思わず動きを止めた。
ぽかんとした表情でルディアスの顔を仰ぎ、次いでウィゼスがいる方向を見やる。
ウィゼスは花音の視線を受け、やがて「ご名答」と微笑んだ。
その返答に、花音は焦りを隠せなかった。

「ちょ、ちょっと待ってください！私には絶対に無理ですって！」
「もちろんこれはわしの仮説に過ぎぬ。しかし試してみる価値はあるのではないかと思うてな」
「で、でもウィゼス様でも開けられない扉を開けることなんて」
「落ち着け。これでじじいの仮説が正しければ、巫女の存在が現実味を帯びる。お前が巫女であると証明できるのだぞ？そもそも仮説は不確かなものだ、開けられなくとも何ら問題はない」

うろたえる花音を横目で見ながら、ルディアスが諭すように言った。
確かに、ルディアスの言葉はもっともだ。だが、突然すぎて頭がついてこないのだ。
祠の最奥で何かしらの情報をつかむことができれば、花音が月女神の巫女であるという線が濃厚になる。そのためには扉を開けなくてはならないが、花音にその力があるとは到底思えない。
しかし、いつまでも候補の立場に甘んじてはいられないし、自分が月女神の巫女なのかどうかを早く見極めたいという気持ちもある。
それに、ルディアスのような国の枢機を担う立場の者としても、

国の存亡に関わる事柄は早いうちに決着してしまいたいのではないだろうか。
ここまで考えて、花音は頭に浮かんだ考えを一掃し勢い良く立ち上がった。

「……ええい、うじうじしてても仕方ない！成せば成るって言うし、失敗してもいいからやってみるべきだよね！？」

自分を奮い立たせるかのように言い放ち、花音は隣に立つルディアスの方へ顔を向ける。
ルディアスは花音と視線を合わせると、にやりと笑って腕組みをした。

「ふん、俺の見込み違いなどではなさそうだな。良く言った」
「だってさ、考えてたって前には進まないでしょ？だったらチャレンジしてみるしかないじゃない。私が異世界（ここ）にいる意味を早く知りたいし……それに、怖くてもルディアスとキルスがいてくれるからきっと大丈夫だよ」

そう言って笑うと、ルディアスは虚を突かれたような表情を浮かべてから面白いものを見る目で花音を眺める。キルスもルディアスと同じような反応を見せていたが、やがて腰に手を当てて小さくため息をついた。

「重大なことだというのに……まったくお前という奴は」
「素直すぎるのも考えものだが――そういう思考も悪くはない、だろう？」
「……それは」

珍しく言い淀むキルスを見て、ルディアスはふっと喉の奥で笑う。

花音はそのやりとりを黙って見ていたが、キルスがなんともいえない表情でこちらに視線を向けてくるので少しだけ首を傾げてみる。
眉根を寄せたままぷいと顔を反らされた。よくわからないが、失礼な男だ。

「――決まりじゃの」

横道に逸れてしまっていた話を引き戻すかのように、ウィゼスがぱんと両手を打ち鳴らす。

「“祈り”の時間が終わる前に祠に辿り着かねばなりませぬ。これから祠へ案内させていただきますゆえ、わしの後に着いてきてくだされ」

そう言うと、ウィゼスは踵を返してゆっくりと歩き出した。
向かう先は、隠匿された月女神の巫女縁の場所。
花音は服の上から月のペンダントを握り締め、不安と期待が入り混じったような胸のざわめきを押さえ込むように、目を閉じてひとつ息を吐く。

（大丈夫、ひとりじゃないもの）

心の中でそうひとりごちて、花音は月のペンダントから手を離す。
そして、置いていかれないように早足で彼らの後を追った。

ａｃｔ．１３（後書き）

今回は説明が多くてどう書こうか迷いました（汗）
ルディアスとキルスがなんだか空気。
次回はそんなことないよ多分！
リューレの出番が無くてあれなんですけどね……彼の出番はもう少々お待ちください。

act. 14

ウィゼスに案内された先は、リース神殿の裏手にある森の入り口だった。

森、といってもそれほど深くなく、まばらに生えた木々を寄せ集めてできたもの、というような印象を受ける。森の先に目を凝らすと、小高い丘と一本の川が木々の間から覗いていた。

森の手前はなだらかな斜面になっており、短く刈り取られた芝生が一面を覆っている。

花音達はそこを上りきり、森の手前で足を止めた。

ここまで来る途中に聞かされた話によると、祠はこの森の中にあるが、森全体に施された結界によって道は閉ざされており、結界を解かない限り祠へは辿り着けない仕組みになっているのだそうだ。もし何も知らずにこの場所を訪れたとしても、ただ向こう側への通り道として認識されるだけで普通の森と何ら変わりはない。結界を解いたときにだけ、祠への道が現れるのだ。

爽やかな風が吹き抜けていく。花音は風になびく髪を抑えながら心地良さそうに目を細めた。

視界の端で、ウィゼスが手を前にかざし何事かを呟いている。否、唱えているといったほうが正しい。その証拠に、ウィゼスの呪文が終わった瞬間、何かが消失したような奇妙な感覚が花音を襲う。空気が変わった、とでもいうのだろうか。

花音は何が起こったのか知りたくて、きょろきょろと周囲を見渡した。

目の前の森に目立った変化はなく、祠らしきものも見当たらない。

花音は不思議そうに首を傾げ、隣に立つキルスの服の裾を引っ張

った。

「ねえ、祠見当たらないよ？」

花音の疑問は、キルスにとっても疑問だったらしい。

キルスはつかまれた服と花音とを見比べてから、仏頂面のまま口を開いた。

「私にわかるわけがないだろう。ウィゼス様のお言葉を待て。……それとお前、服が伸びるから早く手を離せ」

「えー、別にいいじゃない。減るもんじゃないし、ちょっと呼んだだけじゃん」

「良くないだろう！仮にも女なら少しは慎みを持て」

「ちょっと何よそれ！服がダメなら手のほうがいいってこと！？」

「誰もそんなことは言っていないだろう！だいたいお前は――」

ぎゃあぎゃあと騒ぎ始めた二人を見やり、ルディアスは腕組みをしながら何度か肩を揺らす。

目の前で異世界の少女に説教をかましている自分の護衛は、能力は申し分ないものの真面目で融通が利かない性格だ。そのため、異世界の少女が目の前に現れたときにも、主である国王を守るために苦言を呈していた。

あれから幾日か経過しているが、彼と少女の関係は口喧しい男とそれに反発する娘のまま。

国王と“賢者”の前であることも忘れて口論する二人の姿はなかなか面白い。止めるのは容易いことだが、ただ面白いからという理由で、ルディアスは敢えてそうしなかった。

――胸の奥底でわずかに蠢(うごめ)いた知らない感情を知ろうともせず。

「――もういいだろう、キルス。祠に入る前に日が暮れてしまうぞ」

時間にして一分足らずのところで、ようやくルディアスがキルスを止めた。
キルスは諌められたことにはっとして花音から距離をとり、ルディアスとウィゼスに頭を下げる。
「申し訳ございません。陛下とウィゼス様の御前でこのような醜態を」
「俺の所有物（モノ）に躾を施しただけだろう？問題はない」
「ちょっと、あんたは何を言い出すのよ！まったくどいつもこいつも……」
花音が不貞腐れたようにぶつぶつと恨み言を呟いていると、頭の上にぽんと手が乗せられた。
視線を上にずらすと、そこにはウィゼスの茶目っ気たっぷりな笑顔があった。
「ほっほ、おぬしも罪な娘じゃのう」
「……？あの、どういう」
「――さて、皆様方。ここからは真面目な話に移るとしましょうかの」
花音の問いには答えず、ウィゼスはすっと手を退かして真剣な顔つきに戻る。
何となく釈然としない気分になりながらも、花音は本来の目的を思い出し大人しくウィゼスの言葉を待った。
「祠への道は既に開いておる。しかし、残念ながらわしはここから先に行くことができませぬ」
「えっ、どうしてですか？」

「神官長ともなるとやらなければならないことが多くての。神殿を長くは空けられないのじゃよ」

花音はなるほど、と合点がいったように頷いた。

ウィゼスは本来ならば“祈り”に参加しなければならない立場のはずだ。

それを曲げてまでも自分達に付き合ってくれているのだろう――そしてそれはルディアスとキルスにもいえること。目的は違えど、花音のために時間を割いてくれていることに変わりは無い。

花音は今更ながら、自分が彼らに与える影響の大きさを実感した。

「扉まではこのまま先に進んでいただければ結構です。――扉の先に何が待ち受けているかはわかりませぬ。どうかお気をつけて」

ウィゼスの忠告を背中に受けながら、三人は森の中に足を踏み入れた。

＊

森の中に入った瞬間、周囲が真っ暗になった。

両隣にいたはずの二人の姿さえ見えなくなり、恐怖で足が竦んでしまう。

「や、やだ……二人ともどこにいるの！？」

「心配せずともここにいる」

隣から落ち着いた声が聞こえたと思うと、声のした方向が仄かに明るくなった。

急いでそちらを見やると、ルディアスがどこからか取り出したランプに魔法で火を灯していた。

そのすぐ傍にはもう一人の同行者の姿もある。花音はほっと胸を撫で下ろした。

「よかったー、いきなり暗くなったから怖かったんだ」

「ふん、ランプを持ってきておいて正解だったな――それで、ここが例の祠とやらか？」

言いながら、ルディアスが周囲を照らすようにランプを掲げた。ごつごつした岩肌が剥き出しになった、まさに洞窟といったような場所。でこぼこした道は暗闇の先に真っ直ぐ続いているようだったが、どれほど長いのかはわからない。

「――どうやら、間違いなさそうですね。陛下、ランプは私が」

キルスがルディアスからランプを受け取り、先導するように歩き始めた。

花音はその姿を視界の端にとらえつつもすぐに歩き出そうとはせず、後ろを確認するためくるりと振り返る。しかし、そこにあるのは闇ばかりで道は見えなかった。

ちゃんと帰れるのだろうか、と体をぶるりと震わせる花音の頭に、ルディアスの手が伸びたかと思うと、そのままがっちりと掴まれる。

「あたたたた！ちょっと！痛い、痛いって！」

「呆けているお前が悪い。さっさと行くぞ」

「わ、わかったから！いたた、いいから離してよ！」

花音は慌ててルディアスの手を離し、距離をとった。

「うう……私は何もしてないのに！」

軽く痛む頭を擦りながら、花音はルディアスを睨み付けた。
ルディアスは人の悪い笑みを浮かべながら、踵を返して歩き出す。
それにむっとした花音は、イライラを隠そうともせず早足でルディアスを追い抜いていく。
――と、その瞬間、あろうことか花音は張り出た岩に足をとられてしまった。

「う、わ……！」

まずいと思ったときには既に遅く、花音の体は急速に前のめりになっていく。
ぶつかる――と反射的に目を瞑ったが、やってきたのは全身を襲うはずの痛みではなく、勢い良く腕を引かれる感覚だった。次いで、顔に柔らかな布の感触が伝わってくる。
花音は恐る恐る目を開けた。

「あ……」

目の前には、見覚えのある服。見上げれば、こちらを見下ろす青い瞳と視線がかち合う。
片腕をとらえられたまま、花音はルディアスに抱きとめられた格好になっていた。
咄嗟に手を伸ばして助けてくれたのだろう。

（距離、あいてたのに。さっきまで人のこと散々からかってたくせに、助けてくれたんだ）

そんなことをぼんやり考えていると、いつまでも動こうとしない花音を不思議に思ったのか、ルディアスが声をかけてくる。

「――どうした？」

その声にはっとし、花音は慌てた様子でルディアスから離れようと身をよじる。

「あ、うわ、ごめん！……って、離してくれなきゃ離れられないんですけど」

片手は未だ解放されず、腰に手が回されているともなれば自力で離れるのは不可能。

助けられたのは事実ではあるが、まるで抱き締められているような格好でい続けるのは恥ずかしい。

しかし、ルディアスからの返答はない。花音は困ったようにルディアスを見上げた。

「ねー、ルディアス？」

「……」

話しかけるも、ルディアスは微動だにしない。

もしかして、離してくれないのはお礼を言っていないからだろうか。

「あの、助けてくれてありがとう。でも、早く行かなきゃキルス先に行っちゃうよ？」

だから離して、と少しだけ首を傾げてみせる。

キルスは安全確認も兼ねて二人の先を歩いていたが、それほど離れた場所にいるわけではないため、一連の流れも当然知っているはずだ。それでも声をかけてこないのは、彼の中で取るに足らないことだからであろう。

花音は上半身を軽く捻ってキルスがいるはずの場所に顔を向けた。やはり距離は開いてしまっているものの、ランプの光がぎりぎり届く位置にいるようだ。こちらに背を向け、周囲を注意深く観察している。

自分達も、早く行かなければ。

しかし、ルディアスは足を進める気はないようで、花音から視線を外そうとしない。

じっと見られるのは、なんとも居心地が悪い。

「ねえ、ルディアスってば。早く行こうよ。ちょっと、聞いてるの？」

急かすように、ぺちぺちと頬を軽く叩いてみる。

すると、ルディアスは今気付いたかのようにあっさりと掴んでいた腕を解放した。

それにほっとする暇もなく、ルディアスは離れようとしていた花音の体をもう一度引き寄せぎゅっと抱き締めた。

「え……？」

何が起きたのか理解する前に、全身を包むぬくもりがゆっくりと離れていく。

ぽかんとした表情で花音がルディアスを見上げると、彼は満足そうに笑っていた。

「本当に、お前は面白い。まったく飽きんな」

「は？飽きないって、どういう」

意味がわからず聞き返そうとしたところで、ルディアスが花音の手をとった。

その行動に花音はますます困惑し、恥ずかしさで頬を染めながら繋がれた手とルディアスを見比べる。

（え、何これルディアスがなんかおかしいんだけど！さっきから何なのこの人！てかスキンシップ過多じゃない！？私こういうこと慣れてないんだからやめてよもー！）

何を言っていいかわからずあたふたしている花音に、ルディアスはまたにやりと笑う。

「目を離した隙に転ばれて怪我でもされたら面倒だからな」
「だ、だからって……！心配しなくても一人で歩けるんだけど！」
「くくっ、知らんな？行くぞ」

ルディアスは尚も反論しようとする花音の手を半ば強引に引いて歩き出す。
花音はそんなルディアスに何か言おうとしたが、キルスに追いつくことが先決だと思い直し、大人しくついていくことにした。

（うう、がっちり掴まれてるから振り解けないし。でもまた足止められても嫌だから……恥ずかしいけど我慢しよう。まったく、どういう風の吹き回しだよー）

花音は、知らない。
たとえどんな理由であれ、ルディアスがこんな風に女性と手を繋いで歩くことなどただ一度もなかったということを。
合流したキルスが仰天してランプを取り落としそうな勢いでルディアスに問い詰めた際にその事実が発覚したのだが、花音はそのとき羞恥心と手汗の心配ばかりしていたため、事の重大さに気付くことはなかった。

act. 14（後書き）

皆様いつもありがとうございます！励みになっています！

今回はルディアスの変化、といったところでしょうか。ほんの少しだけ。

キルスはあんま変わってませんね。

ルディアスとキルスは少しずつデレさせているつもりですが、本格的なのはまだまだ。

いずれどっちのキャラも甘くしていきますよ！

よろしければ感想などお聞かせください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4048g/

Fairy tale

2011年11月12日09時38分発行